ビデオ「金沢ことば」の解説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23813

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ビデオ「金沢ことば」の解説

平成11年３月

金沢市教育委員会

例　言

1．　この冊子は，平成７年度から同９年度までの３年間にわたり金沢市教育委員会が委託制作した「ビデオ　金沢ことば」３巻の理解を深めていただくために作成した解説です。

2．　ビデオ３巻の制作は㈱北陸スタッフに委託し，解説は金沢大学教育学部助教授加藤和夫氏に執筆していただきました。

3．　「ビデオ　金沢ことば」３巻の構成と主な内容は次のとおりです。

①　第一部は，「おいであすばせ」のタイトルで，商家，茶屋街，近江町市場などにおける接客言葉を紹介しています。約16分です。

②　第二部は，「あんやと　気の毒な」のタイトルで，様々な職業の人を尋ね，金沢の暮らしに溶け込む金沢ことばを紹介しています。約21分です。

③　第三部は，「ことばは町しるべ」のタイトルで，水引業を継いだ女性，詩人，茶屋街の女性の会話，アマチュア劇団のギャグライブ，朗読などを通して，職業や街そして世代の違いによる金沢ことばを紹介しています。約18分です。

目　次

1．はじめに …… 1

2．金沢ことばの位置づけ …… 1
　2.1　全国の中の北陸のことば・石川のことば …… 1
　2.2　石川のことば・加賀のことばの中の金沢ことば …… 3

3．第一部「おいであすばせ」にみる金沢ことば …… 5

4．第二部「あんやと　気の毒な」にみる金沢ことば …… 14

5．第三部「ことばは町しるべ」にみる金沢ことば …… 26

6．金沢ことばの現在と将来ーまとめにかえてー …… 35

1．はじめに

本稿は，ビデオ「金沢ことば」を視聴なさる皆さんに，そこに登場する金沢ことば，特に伝統的な金沢ことばの姿とその特徴を理解していただくための道案内役として執筆したものです。

明治20年代以降の標準語制定の気運の高まりとともに，わが国では学校教育を中心として，方言は標準語に対して悪いことば，汚いことばとされ，撲滅や矯正の対象とされてきました。戦後は少しづつその地位を回復してきたものの，いまだに方言を劣ったことば，汚いことばと考えている人は少なくないようです。加えて戦後，テレビに代表されるマスメディアの発達は共通語（本稿では以後標準語と同義で「共通語」と呼びます）の普及に拍車をかけ，各地の伝統的方言（江戸時代に各地で成立し，現在でいうとおおよそ70歳代以上の世代で使われるような方言をさします）は急速に衰退に向かいました。金沢の方言もまた例外ではありませんでした。

ところが方言衰退の危機感も手伝ってか，近年は全国的に方言見直しの動きが盛んです。今や共通語が公的な場面や広い範囲でのコミュニケーションに欠かせないものとなっているのと同様に，方言もまた地域社会でのコミュニケーションにとって欠くことのできない大切なことばであることに気づき始めたのです。長い歴史を経て成立した現代の日本語は，決して共通語だけで成り立っているのではなく，全国各地の多彩な方言とともに存在しているのです。一般に方言と言うと共通語と形や発音の違うものだけを考えがちですが，「方言」とは「ある地域社会で用いられる言語体系全体」をさします。つまり，発音・アクセント・文法・語彙など，ある地方で使われていることばの全てが方言であり，日本語の一部なのです。

伝統的方言が確実に衰退に向かいつつある今，私たちはその地域で長く受け継がれてきた方言，自分たちが普段の生活の中で使っている方言を今一度見つめ直し，共通語との違いをよく知ると同時に，それぞれが持っている価値や機能を正当に評価する必要があるように思います。今世紀末の金沢方言を記録したビデオ「金沢ことば」が，その手助けとなることを願ってやみません。

2．金沢ことばの位置づけ

2.1　全国の中の北陸のことば・石川のことば

ここではまず，北陸地方のことば，そしてその中の金沢を含む石川県のことばが，全国的にはどのような位置にあるのかを方言区画的立場から見ておきたいと思います。

次に示すのは東条操氏による日本の方言区画案とその区画図（図１）です。東条操氏以外の方言区画案もいくつかありますが，北陸の方言の位置づけについてはどれもほぼ共通しています。すなわち，石川県方言が属する北陸の方言はかつての中央語地域である近畿地方を中心とした西部方言にまず大きく含まれ，中でも京都・大阪を中心とした近畿方言

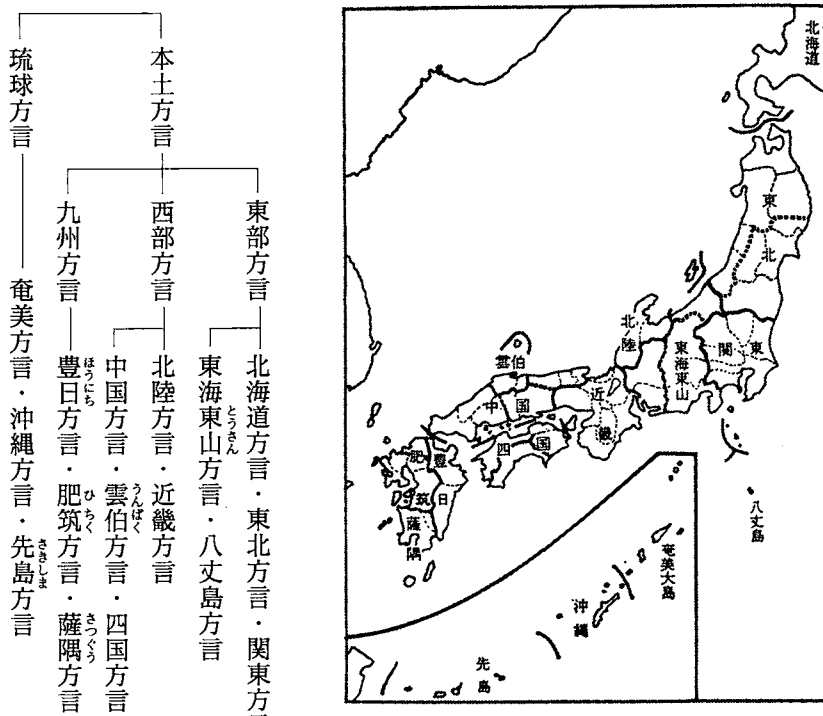

図１　日本の方言区画図

に共通する特徴を多く持ちます。石川県出身の人が東京などで話していて近畿地方出身者に間違えられることがあるという話を聞くことがありますが，その方言的特徴からすればそう不思議なことではありません。

近畿方言との共通性は文法的特徴において顕著に見られます。動詞のオル（居る），イカン（行かない），イカナンダ・イカンカッタ（行かなかった），コータ（買った）・ワローータ（笑った），カッタ（借りた），アイタ（飽きた），形容詞のアコナイ（赤くない），アコナル（赤くなる），さらに助動詞・助詞等のアメヤ（雨だ），アメヤロー（雨だろう），フットル（降っている），フルサカイ（降るから）など，いずれも北陸の方言が近畿方言の影響を強く受けてきたことを示すものです。

語彙においても，シアサッテ（明明後日），オトツイ（一昨日），マイゲ（眉毛），メー（目），ホーベタ（頬），ベニサシユビ・ベンサシユビ・ベンツケユビ（薬指），キビス（踵），ヤイト（灸），イカ（凧），新しいところで，カッターシャツ（ワイシャツ），オシピン（画鋲），ペケ（×印）など，北陸方言が西部方言や近畿方言の語形と一致する例が数多くあります。そして，近畿方言の語形と一致しないものの中にも，北陸方言の語形がかつて近畿地方でも使われたものの名残である場合も多いのです。

音韻については，イとエの混同や富山県沿岸部と石川県能登内浦地方でシ・ス，ジ・ズ，チ・ツがそれぞれ同音で発音されるなど，一部に東北方言的特徴も見えますが，同時に，例えば「目」をメー，「手」をテーと発音するなどの近畿方言的特徴も見えます。音韻的現象の中でもアクセントについては，北陸方言は極めて複雑な様相を呈します。富山県こそ県内の地域差が少ないものの，石川・福井両県は東京式アクセント，京阪式アクセント，無型アクセントなど様々なアクセントタイプが分布し注目されます。単語個々のアクセントなどは京阪式アクセントに近い姿を示すものが多い反面，体系的には音の下がり目の位置が重要という点で東京式アクセントに近い性質も持ちます。その他，アクセントを含めた音韻に関して，北陸方言は東日本と西日本の両方の特徴を併せ持った中間的方言と言えそうです。

一方，近畿方言とは無関係に北陸方言として独自の分布を見せるものもあります。文節末や文末で末尾母音が長音化しながらうねるように揺れるイントネーションもその一つですし，俚言的なものとしては，塩味の濃いことを言うクドイ，感謝の挨拶ことばキノドクナ，新しいところで小・中学校の通学区域をさすコーカ（岐阜県にも分布します），歌の歌詞を数える～ダイメ（石川・富山県のみに分布。共通語の「番」にあたるものです）などがその例です。

このように見てきますと，福井県嶺北地方と石川・富山両県の方言は，北陸方言としての共通性を多く持ちながらも，福井県嶺北地方と富山・石川両県の間に違いが見られるものも少なくありません。連体格の助詞「の」にあたるものが，福井はノであるのに石川・富山がカ゜であるなどです。江戸時代に石川・富山両県のことばが同じ加賀藩の領域として共通性を育てる一方で，福井県との違いが生じたものと思われます。

2.2　石川のことば・加賀のことばの中の金沢ことば

石川県の方言は図２でもわかるとおり，羽咋郡以北の能登方言と河北郡以南の加賀方言に大きく二分されます。能登と加賀の違いは，「私」をさすオラーウラ（左が能登の方言形，右が加賀の方言形），「蛙」のギャットーギャワズ，「匂い」のフカ゜・ホカ゜ーカザ，「いいえ」のベッチャーナーン，「塩辛い」のカライ―クドイ，「霜焼け」のユキヤケーシンバレなどに見られます。

ところで能登方言の場合，京都方面から北国街道沿いに連続的に言葉が伝播して加賀を経て能登に至り，その結果現在加賀方言に比べて古い状態を残している一方で，北前船ルートに代表されるような海上交通の関係で，加賀を経由しないで福井から一足飛びに伝わった言葉もあるようです。

それに対して加賀方言は，京都方面から北国街道沿いに福井を経て連続的に言葉が伝播したものと，城下町金沢が京都や福井方面のことばを直接受け入れ，後に金沢から周辺に広まったものがあると思われます。「～なさる」にあたるマサル系の敬語助動詞（マサル・マシャル・マッシャル）などの分布は後者に属するものでしょう。

このように金沢ことば（金沢方言）は，周辺の加賀方言との共通性をベースとしながら

も，加賀百万石という大藩の城下町として京文化の影響を強く受け，また城下町特有の複雑な人間関係や社会構造を背景としながら，独自の性格を持つに至ったと考えられます。多くの城下町に共通する特徴は，周辺の農村社会と異なり，様々な職種や階層の人々が混住する社会だということです。そこでは自ずと複雑な人間関係を円滑に保つための敬語や挨拶表現が発達しやすくなります。この点については金沢のことばも例外ではなく，ビデオに登場する金沢ことば，特に町屋の金沢ことばにそうした特徴を見ることができます。しかし，「金沢ことば」とは，そのような町屋の金沢ことばだけをさすのではなく，それをも含んで様々な職種や階層の人たちに使われていることばの集合体です。金沢の町に暮らす様々な人たち，中でもごく一般の人たちに使われてきた普段着の飾らない金沢ことば，それこそが「金沢ことば」と呼ぶに最もふさわしいものだと考えます。

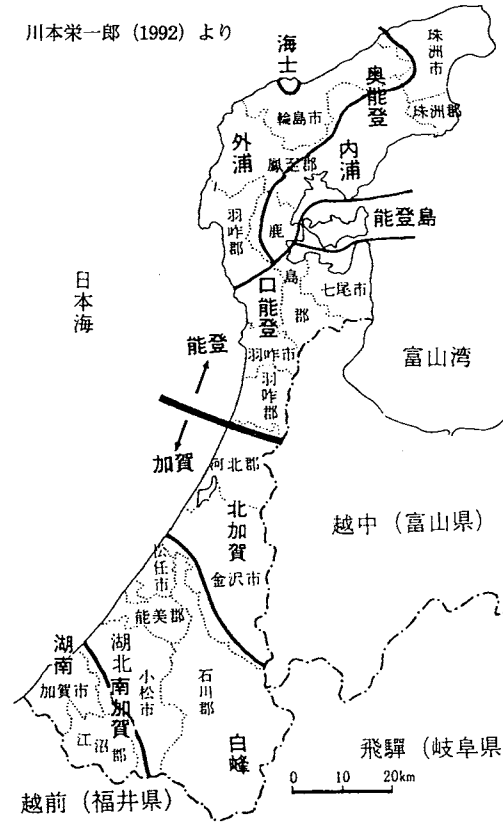

図2　石川県の方言区画図

ビデオに登場する方言談話の文字化にあたって

本稿では，ビデオに収録された金沢ことばの会話を，紙数の許す範囲でできる限り文字化し，それに共通語訳を付けるとともに適宜注記を加えました。

文字化にあたっては，ビデオから聞こえる金沢ことばの発音にできるだけ近い表音的片仮名表記（ゴシック体）とし，片仮名表記の下には括弧に囲んで漢字仮名交じりでその共通語訳を付しました。複数の話し手の会話では，何人かの声が重なっている部分もありますが，それらを逐一様々な記号等を用いて忠実に示すことはかえって煩雑になると考え，便宜的に会話の重なり部分を話し手の交代という形で示しました。また，ある話し手の話に挿入される話し相手のごく短い相づちことばについても一部省略した部分があります。笑い声の聞こえる部分の記載についても省略しました。

以下，本解説書における方言談話の文字化（表音的片仮名表記）にあたっての方針について説明しておきます。

①文字化にあたっては，文節分かち書きを原則とし，アクセントおよびイントネーションについての情報は省略しました。

②助詞「を」「へ」「は」にあたるものは，ヲ・ヘ・ハと表記せず，発音どおりオ・エ・ワのように表記しました。

③伝統的金沢ことばの発音として現れる語中・語尾のガ行鼻濁音は，語頭のガ・ギ・グ・ゲ・ゴに対してカ゜・キ゜・ク゜・ケ゜・コ゜と表記しました。

④文字化（片仮名）部分で金沢ことばとしての特徴の見える箇所に適宜下線と注番号を付し，文字化部分末尾にまとめて注記しました。

⑤よく聞き取れない箇所，あるいは意味が不明の箇所には片仮名の下に波線を付しました。

⑥文字化部分のうちで，ビデオの画面に字幕で登場する単語や表現などには網かけを付しました。

3．第一部「おいであすばせ」にみる金沢ことば

第一部では金沢城にほど近い（石垣下）の商家や茶屋街などに受け継がれてきた町屋の金沢ことばが多く登場します。そこには，一般の庶民に使われた金沢ことばをもとにしながら，様々な職種の人々が暮らす城下町で，独自の発達を遂げたと考えられる丁寧で洗練された金沢ことばの一面を見ることができます。

最初はリヤカーをひく豆腐屋と橋の上ですれ違う女性の会話です。

A〔豆腐屋〕：アー　マイドサン[1]。　キョァー　マタ　アツイヒニ　ナリミシテ[2]。
（ああ　こんにちは。　今日は　また　暑い日に　なりまして。）

B〔女　性〕：オイネー[3]　マー　ツユモ　アカ゜ッタンカー[4]　アツーナッテネー。
（ええ　まあ　梅雨も　あがったのか　暑くなってねえ。）

A：アー　ホンナ[5]。
（ああ　それでは。）

(1)「毎度さん」で，人と出会ったときや他家を訪問したときの挨拶ことば。「こんにちは」「こんばんは」にあたります。

(2) ミシテはミスの連用形ミシ＋テ。ミスは共通語の丁寧表現「～ます」にあたります。マスの音変化形かとも言われます。上品な金沢の町屋ことばの代表的なもの一つでしたが，最近は年輩の人たちからもほとんど聞かれなくなっています。

(3) 相手の言ったことを肯定するときの相づちことばとしてよく使われます。

(4) ここではカの後に１拍分ほどの長音化があり，その部分のイントネーションが一度下降して再び上昇します。このような，文節末や文末に現れる独特のうねるような

イントネーションは全国的にも北陸方言特有のものとされ，従来「うねりイントネーション」「ゆすりイントネーション」「間投イントネーション」などの名で呼ばれてきました。この種のイントネーションは若い人たちにも比較的よく受け継がれていて，北陸方言に共通する代表的特徴の一つとして注目しておきたいものです。3巻のビデオに収録された金沢ことばにも，随所にこの独特のイントネーションが聞かれます。注意して聞いてみて下さい。

(5)「これ」「それ」「あれ」「どれ」といったコソアド系のソ系（ソレ，ソノ，ソコ，ソシテ，ソレデ，ソーヤ，ソーカ，ソンナなど）のソがホに変化し，ホレ，ホノ，ホコ，ホイテ，ホンデ，ホーヤ，ホーケ，そしてここでのようにホンナとなる特徴があります。他の文字化部分でもこの特徴は数多く確認できます。金沢を中心とした加賀地方の一部と福井県嶺北地方，滋賀県などに同様の現象が盛んです。

次に外国人女性が浴衣姿で駆けて来て，先の豆腐屋に豆腐を注文する場面が見られます。外国人女性の口からは意外にも金沢ことばが聞こえてきます。金沢にもたくさんの外国の人が住んでいますが，演技でなく実際にもこんなふうに上手に金沢ことばを話す人がいるかもしれませんね。

A〔外国人女性〕：キノドクヤケド(1)　トーフ　ニチョー　ヤッコニ　キッテモラエンケ(2)。
（すみませんが　豆腐を　二丁　冷奴用に　切ってもらえないか。
ホンデー　ヒローズ(3)モ　フタツ　ホシンヤ(4)ワ。
それで　がんもどきも　二つ　欲しいんだよ。）
B〔豆腐屋〕：ハヤー　アンタサンナ(5)　ドコノクニノ　オヒト(6)ヤイネ。
（あれまあ　あなたは　どこの国の　人だね。）
A：ナーン(7)　カナザワノモンヤ。
（いいえ　金沢の者だ。）

(1)「気の毒やけど」で，自分のために負担を負う相手に「申し訳ない，すまない」という気持ちを表す表現です。転じてキノドクナの形で「ありがとう」にあたる相手への感謝の表現としても用いられます。感謝の意のキノドクナは北陸の福井・石川・富山の3県でのみ使用されます。他地方出身者には共通語的な同情の意の表現と誤解されやすいので注意が必要です。

(2) 疑問の意の終助詞で共通語の「か」にあたります。金沢ではカも使われますが，カよりもケの方が親しみをこめたやさしい表現と意識されており，若い人たちからもケはよく聞かれます。ところが，大阪を中心とする関西弁や近畿周辺部ではカよりもケがぞんざいな意味になりますので，これも誤解されやすいものです。

(3) おでんなどの料理に使う「がんもどき」のことです。石川県では金沢のほか加賀市などでもこう言います。ポルトガル語のfilhos（ヒリョーズ）に由来します。

(4) 指定・断定の意の助動詞で共通語の「だ」にあたるものです。近畿方言と共通する

特徴の代表的なものです。

(5) ここでは，助詞の「は」にあたるワがンに後接してナに変化したものです。

(6) 他人をさして丁寧に言う言い方で，オヒトサンのように言うこともあります。

(7)「何も」にあたるナーモがナーンに変化した形です。相手の言ったことへの軽い否定を表します。石川県の加賀地方と富山県の一部で使われます。伝統的な能登地方の方言ではベッチャ（「別ヤ」から）と言います。

次は町屋（町方）の金沢ことばによる年輩の男女の対談です。ここに登場する金沢ことばの中には，現在ではあまり使われなくなったものもありますが，一般の人の金沢ことばとはやや異なる，お城周辺の商家や茶屋街などで使われていた町屋の金沢ことばの様子を知ることができます。

A〔男〕：アラ　ヨー　オイデアソバセ(1)。ダレサンヤト　オモタラー(2) アリャー。
（あら　よく　いらっしゃいました。どなたかと　思ったら　あれ。
＜中　略＞ **ミナ　オタッシャデ　オイデミスケ(3)。**
皆さんお元気で　いらっしゃいますか。）

B〔女〕：アンヤトー(4)　ゲンキデ　オリミスワネ。
（ありがとう　元気で　おりますよ。）

A：アー　ソーケ　ソーケ　ナニヨリ…。
（ああ　そうか　そうか　何よりで…。）

B：アンヤトー。
（ありがとう。）

A：オココロ　アリャコソ　ヨー　タズネテキテイタダイテ。イクツ　ナンジュンナッテモ
（お気持ちがあればこそ　よく　訪ねてきていただいて。いくつ　何十になっても
タノシミナコッチャ。アラ　アラ　コラ　ワシャ　チョット　カミザンナルケドモ。
楽しみなことだ。　あら　あら　これは　私が　ちょっと　上座になるけれども。）

B：ナー　ナン。　ソンナコト　オッシャラント　マダ…。
（なに　いいえ。そんなことおっしゃらないで　まだ…。）

A：アー　ホーケ　ホケ　ホンナラ。
（ああ　そうか　そうか　それなら。）

B：エー　ドーゾ　ドーゾ。
（ええ　どうぞ　どうぞ。）

A：イヤー　ココエ　コリャ　ナツカシコッチャ。　ナカ゛イキシェンナンネ(5)。
（いやあ　ここへ　これは　懐かしいことだ。　長生きしなくてはいけないね。）

B：ホント　ナカ゛イコト　トッテヤネー　ホントニー。
（ほんと　長いこと（年を）とられたねえ　本当に。）

A：ンー。　ホーケ　ホーケ。　アー。　アノジブンノ　コトオ　オモイダスト　ンナ

(うん。　そうか　そうか。　ああ　　あの頃の　　ことを　思い出すと　そんな
ンナモン　ハナシャ　イロイロ　アルケドモ。
そんなもの　話は　　色々　　あるけれども。)

B：タクサンネー。
(たくさんねえ。)

A：ア　アー　タクサン　アルケド。
(あ　ああ　たくさん　あるけれど。)

B：ホントヤネー。
(本当だねえ。)

A：イツマデモ　ハヤ　ワカイ　オキレーナコッチャワイ。
(いつまでも　まあ　若い　　お綺麗なことだね。)

B：アッ　アンヤトー。
(あ　　ありがとう。)

＜中　略＞

A：ワシノ　ドーラクヤトコトイネ[6]**。**
(私の　　道楽なんだよ。)

B：アラ　イーワー。　アソコガ゛　ドコケ。
(あら　いいわ。　　あそこが　どこだい。)

A：オイネ　ホレ　アノ　カケズクリ。
(はい　　それ　あの　掛作り＝橋場町だ。)

＜中　略＞

A：ソノ　トナリガ゛　カワイノ　ヨーヒンテン。アノ　ヒケ゛ノ　アンサン。
(その　隣が　　カワイの　洋品店。　　あの　ヒゲの　ご主人。
イヤ　ソレニシテモー　ワシャ　イツモ　オモトルヤケドモー　コノ　アサノ
いや　それにしても　　私は　　いつも　思っているんだけれども　この
カ゛ワノ　ミズセッチュモンナー　ムカシモ　イマモ　カワラン。　コンデ　ア
浅野川の　水瀬というものは　　昔も　　今も　　変わらない。これで　浅
サイナカ゛ラモ　コンデ　トートートシテ　ナカ゛レトッテ　コノ　フーケーモ
いながらも　　これ　　滔々として　　流れていて　　この　風景も
ワスレラレン　アジカ゛アル　アルカ゛ヤトコトイネ[6]**。**
忘れられない　味がある　　あるんだよ。)

＜中　略＞

B：ヨー　アソコノ　ハシノトコエ　ナツ　アノ　キズモモ　ウリニキテネー。
(よく　あそこの　橋の所へ　　夏に　あの　傷桃を　　売りに来てねえ。)

A：ソー　ソー　ソー　キズノ　アンニャマ。
(そう　そう　そう　傷の　　兄さん。)

B：ウーン。　ホーヤ　ホーヤ。

（うん。　そうだ　そうだ。）

A：ハナカラ　トッペン　ダイテ[7]　ホイテ　ネンネコ　ヒザニ　ダキコンデー　ソ

（鼻から　鼻ちょうちん出して　そして　ねんねこ半纏を膝に抱き込んで

シテ　オトッツァン　キズモンモ　コーテフタンシェノーッテューナコト　ユ

そして　父ちゃん　傷ものも　買って下さいよというようなことを　言

ーテ。ナンボヤ　ユータラ　オー　マケトクサカイ[8]　コーテフタンシェノーッテ。

って。いくらだと言ったら　おう　まけておくから　買って下さいよって。）

B：ホントヤネー。

（本当だねえ。）

A：ネー　アレ　コーカ゛カ゛[9]　ネキ゛ッテ　コーカ゛カ゛　マタ　ヒトツノ。

（ねえ　あれを　買うのが　値切って　買うのが　また　一つの。）

B：タノシミナー。

（楽しみな。）

A：タノシミナ。

（楽しみな。）

B：エー　アノ　トイチノ　マエニ　ホラ　バナナノタタキウリカ゛　ネー。

（ええ　あの「といち」という店の前に　ほら　バナナの叩き売りが　ねえ。）

A：オー　ソヤ　ソヤ　ソヤ　ソヤ。

（ああ　そうだ　そうだ　そうだ　そうだ。）

B：ネー。

（ねえ。）

A：アノ　オヤッサン　ゲンキナ　コエデ。

（あの　親父さん　元気な　声で。）

B：ゲンキナ　ヒトヤッタネー。

（元気な　人だったねえ。）

A：ンー。　エー。　オドロケ　バドロ　オドロケ　バドロケ　サンショノキ

（うん。　ええ。　オドロケ　バドロ　オドロケ　バドロケ　山椒の木

テケテットノ　アッパッパ　サー　カイクサランカイッテ。　カイクサランカイ

テケテットの　アッパッパ　さあ　買いやがらんかいと言って。買いやがらんか

ッチューカ゛ヤゾネ

いと言うんだよね。）

B：アー　ホント。

（ああ　本当。）

A：ヤクチャモナイ[10]。

（とんでもない。）

B：アー　ホンナンカ。

（ああ　そうなの。）

A：オキャク　メカ゛ケテ　クサランカイトワ　ナンノコッチャイネ。
（お客に　対して　～やがらんかいとは　何のことだろうね。）
B：ホーントヤネー。
（本当だねえ。）
A：コレモ　シカシ　アサノカ゛ワノ　メーブツヤッタネ。
（これも　しかし　浅野川の　名物だったね。）
B：ネー。
（ねえ。）
A：マーイニチー　アノー　アノ　ムカイノ　オフロヤ　セントー　イクカ゛カ゛
（毎日　あのう　あの　向かいの　お風呂屋　銭湯に　行くのが
シコ゛トデー。
仕事で。）
B：ホントヤネー。
（本当だねえ。）
A：モー　ハ　ナカノハシオ　ワタルコ゛トニ　アー　ココエ　コワロノジブンニ
（もう　中の橋を　渡るごとに　ああ　ここへ　子どもの頃に
ヨー　ヤンチャシニ　アソンニ　キタモンヤッタワイト　オモテ。　ネー。
よく　いたずらをしに　遊びに　来たものだったなあと　思って。　ねえ。）
B：ホントヤネー。　アノヘンノ　マタ　ニキ゛ヤカヤッタワネー。
（本当だねえ。　あの辺の　また　賑やかだったよねえ。）

＜以下省略＞

(1)「いらっしゃる」（「行く・来る・いる」の尊敬語）にあたるオイデル（北陸では富山西部，石川・加賀地方，福井県に分布）に「～なさいませ」にあたる丁寧な命令・勧誘表現～アソバセが結びついた形で，ビデオ第一部のタイトルにもなっています。～アソバセという言い方は北陸では金沢だけに聞かれるもので，かつての京の公家ことばが金沢城下で町屋の接客ことばとして定着したものと考えられます。同じく～アソバセが使われる名古屋の上町（うわまち）ことばが色々な動詞にアソバセがついて使われるのに対し，金沢では特にオイデルと結びついたオイデアソバセ（オイデアスバセ，オイダスバセの発音も）の形で客迎えの挨拶ことばとして受け継がれてきたようです。現在では茶屋街などごく一部の人たちにしか使われていません。

(2) 上記（1）でもふれたオイデルの連用形オイデに丁寧のミス，さらに疑問のケが結びついた形です。ミスは現在ほとんど使われませんが，ミスがマスと入れ替わったオイデマス（「いらっしゃる」の意）は現在でも金沢ことばの敬語表現としてよく用いられています。共通語の敬語に同じような意味のオイデニナルがあることもあり，それと混同してオイデマスを方言だと思っていない人が多いようです。

(3) 共通語では「思ったら」のように促音便になるハ(ワ)行五段動詞の音便形が，金沢では西部方言的にウ音便形オモータラとなり，さらにここでのようにオモタラとも

なります。この種の特徴は，本冊文字化資料中にユーテ・ユータラ（言って・言ったら），コーテ（買って），オータ（会った），モロタ・モロトッタ（貰った・貰っていた）などでも確認できます。現在若い世代では，共通語化により促音便形の方がよく用いられるようになりました。

(4) キノドクナに比べて，気楽な間柄で用いられる軽い感謝の意の挨拶ことばです。

(5) ～ンナンは動詞の未然形に続いて「～なければならない」の意味を表します。例えば書カンナン（書かなければならない），見ンナン（見なければならない）のようにも使われます。

(6) ～トコトはある事柄を自分自身で改めて確認するとともに，相手にもそのことを訴えるような役目をする文末表現です。金沢だけでなく福井県嶺北地方から石川県加賀地方にかけて広く聞かれます。～イネは，やはり文末で相手への訴えかけの意を添える表現で，金沢ことばの例としてよく出される～ガ゜イネ，～ゾイネ，～ワイネの～イネもこれと同じものです。

(7) サ行五段動詞「出す」の連用形ダシがテやタに続くとき，ダシテがダイテとなるサ行イ音便形。これ以外にもホイテ（干して），サイタ（挿した），オトイタ（落とした）のようになります。北陸地方では年輩の人たちから今も聞くことのできる，かつて西日本に広く分布した特徴の名残ですが，若い世代の金沢ことばではほとんど聞かれなくなりました。

(8) サカイは共通語の「から」にあたる理由を表わす接続助詞です。関西方言のサカイと同じもので，北前船など海上交通の関係で，関西地方から北陸を経て東北の日本海側までの広い範囲に分布します。福井県嶺北地方ではサケの形が多く，金沢でも人により場合によりサケの形も聞かれます。第二部冒頭の文字化部分に見られるチントシテオレンモンヤサケ（じっとしていられないものだから）のサケがそれにあたります。

(9) 北陸方言の中でも石川県方言では，金沢を含む広い範囲でハ(ワ)行五段動詞の終止・連体形相当の形が共通語や富山・福井の方言のようにカウ（買う），ワラウ（笑う），モラウ（貰う），チガ゜ウ（違う）とならず，ここでのコーと同じようにワロー，モロー，チコ゜ーのように発音されます。中世の時代に中央語で起こったアウ連母音のオ列長音化（湯治の発音がタウジからトージに変わったのと同じような変化）の名残です。コーキ（買う気）のようにも使われます。

一方，コーガ゜のガ゜は共通語の連体格の助詞「の」にあたるもので，これもかつて中世時代頃まで中央語で用いられた連体格の助詞「の」と「が」のうち，共通語では使われなくなった「が」が方言に残ったものと考えられます。この用法は，石川県以外では新潟・富山両県と四国の高知県にもあります。この連体格の助詞ガ（方言としての発音は鼻濁音のガ゜）もまた本冊の文字化部分の随所で確認できます。若い世代を含め日常会話での使用頻度が高く，石川・富山の方言らしさを象徴する特徴の一つとなっています。

(10)「益体もない」が変化した形。ここでのような意味のほか，「仕方ない。しょうがない」といった意味でも使われます。

このように町屋のことばは，周辺の農村部などに比べて人間関係を円滑に保つための敬語や丁寧なことば使いが発達しやすかったのです。次に金沢素囃子保存会の女性が紹介している「ハバカリサン（すみませんね)」「イラシテオイデアソバセ（またいらして下さいませ〈客を送るときの挨拶ことば〉)」「ゴキミッツァン（ご丁寧な〈感謝の気持ちを表すことば〉)」「チョット　オタズネシミスケド　イマ　ナンドキデ　ゴザイスケ（ちょっとお尋ねしますけれど今は何時でしょうか)」「アンヤトゴザイマス（ありがとうございます)」「ハイルマッシ（お入りなさい〈目上の人には使えない。同輩や年下に対する優しい命令〉)」などもそういった例と言えます。

ビデオは，次に茶屋街での冬の客迎えの場面となります。ここでも接客用の丁寧な金沢ことばが聞かれます。

アラー　ナカ゛イコッテ(1)　ヨーコソ(2)　オイデアスバセ(3)　ナント　タクサン　ユキカ゛
(あらまあ　お久し振りで　ようこそ　いらっしゃいました。何ともたくさん　雪が
フリマシテ　ヒドカッタデショー(4)。　サー　ドーゾ。
降りまして　たいへんだったでしょう。さあどうぞ。)

(1) 久しぶりに訪れた客に対する挨拶ことば。挨拶ことばとして形式化して，前日に来た客に対してでもナカ゛イコッテと言うという話が，ビデオ第三部，東の茶屋街の女性たちの会話の中に出てきます。
(2) 客を迎えるときの挨拶ことばとして一般にもよく用いられます。
(3) ビデオの字幕では「おいだすばせ」と出ていますが実際にはオイデアスバセと発音されています。
(4) 金沢ことばの形容詞ヒドイは共通語の「ひどい」とは意味がずれており，共通語的意味のほか，肉体的・精神的苦痛に対しても使われます。例えば金沢では，酒を飲んで顔色の悪い人に，ヒドイカ？（「つらいか？」転じて「大丈夫か？」の意）と聞いたりします。語形が共通語と一致しているため，ヒドイのこのような使い方を方言だと意識していない人も少なくないようです。

さて，以上のような町屋の金沢ことばに対して，いわゆる庶民の金沢ことばを近江町市場での店員と客のやりとりに見てみましょう。

A〔客〕：トーチャン　コノ　コーバコ(1)　イクラニ　シテクレランヤ(2)。
(父ちゃん　この　こうばこ蟹　いくらに　してくれるんだ。)
B〔店員〕：ホヤネー　ヒトツ　ホンナラ　キューヒャクエンニ　シテアゲ゛ル…。
(そうだねえ　1つ　それなら　900円に　してあげる…。)

A：キューヒャクエン。　アー　タカイネ。　モー　チョッコシ…。　マカランカ
(900円。　　ああ　高いね。　　もう　ちょっと…。　　まけられな
イネー。
いかねえ。)
B：カーチャン　ホノ　コーキ　アランカ[2]　ネーカ゜カネ[3]　ホノ…。
(母ちゃん　　その　買う気があるのか　ないのかね　　その…。)
A：コーキカ゜アルサカイニ　ユートル　キートルカ゜ヤ[3]。ナンボン　ナルカ゜ヤ。
(買う気が　あるから　　言っている　聞いているんだ。いくらになるんだ。)
B：ホンナ　イツツトモ　モッテクカ。
(それなら　5つとも　持っていくか。)
A：ウーン。ホーカ。ホンナ　ホノ　イツツ　ナンボニ　シテクレランヤ[2]。
(うん。　そうか。それなら　その5つで　いくらに　してくれるんだ。)
B：ウーン　ホンナラ　ヨンセンエン。ハイ。
(うん　　それなら　4千円。　　はい。)
A：ヨンセンエン。モーチョッコリ　マカランカネー。　＜以下省略＞
(4千円。　　もうちょっと　　まけられないかねえ。)

(1) ズワイ蟹の雌の呼び名。一般に「香箱」の字が当てられます。福井県では同じズワイ（越前蟹）の雌をセーコと言います。
(2) シテクレランヤは本来「シテクレル＋カ゜ン＋ヤ」で，カ゜ンは先述の連体格の助詞カ゜と同じものです。ルで終わる動詞（ラ行五段動詞，一段動詞，サ変動詞スル，カ変動詞クル）の連体形にカ゜ンが接続する場合に，ルの母音とカ゜の子音が脱落してランという形になったと考えられます。アランカのアランも同様です。
(3) いずれのカ゜も先述の連体格の助詞「の」にあたるものです。

町屋の金沢ことばに比べると，ざっくばらんな実に普段着の金沢ことばが聞かれます。敬語も登場しておらずやや荒っぽい感じは受けますが，こうした会話に見える金沢ことばこそがむしろ一般的な金沢ことばの実態に近いものだと言えるでしょう。ところでビデオでは，市場に並ぶ食材にも金沢独自の呼び名が溢れているとのナレーションとともに，ハチメ（魚のメバル），モミジコ（鱈子），ボブラ（南瓜），ゴンボ（牛蒡），イモノコ（里芋），フカシ（はんぺん），ハベン（蒲鉾の一種），ヒロズ（がんもどき）が紹介されていますが，実はこれらのうちで金沢独自と言えそうなものはフカシくらいで，それ以外は富山県や加賀地方などでも広く使われているものです。

次に県外からの転勤者が聞いた印象に残る金沢ことばということで，～ケ゜ン，～ネン，～ジー，～ケという文末表現と，「貰える」の意の動詞アタルが話題になっています。～ケ゜ン，～ネンは若い世代を中心とした金沢ことばに特徴的な形ですし，アタルは北陸三県の方言に共通する特徴的な用法です。

最後に地元の子ども達が登場します。金沢の次の時代を担って行く子ども達は，年輩の人たちの金沢ことばや自分たちの金沢ことばをどのように考え，生活の中でどのように使っているのでしょうか。これからは，年輩の人たちが受け継いできた伝統的方言ばかりでなく，地域のことばの将来の担い手である若い人や子ども達の方言にももっと目を向けていくことが大切です。

4．第二部「あんやと　気の毒な」にみる金沢ことば

第二部の前半は，金沢の暮らしに溶けこむ様々な職業の人々を訪ね，その人たちの口から語られる金沢ことばを紹介しています。ことばは，話し手の属性（例えば年齢，性，職業など）によって異なる場合がありますが，ビデオに収録された範囲で職業による違いを説明することは容易ではありません。むしろ，商売をやっていらっしゃる方とそうでない方の差，男女差や年齢差の方が見えていると言うべきでしょう。

最初は金沢の伝承遊びの指導をしている女性の金沢ことばです。

◆オンナバッカーリノ　キョーダイデ　ホーイテ　ガッコカラ　カエッテクルト
（女ばかりの　姉妹で　そして　学校から　帰ってくると
イマミタイニ　テレビモ　ナーンモ　ナイシ　ミーンナデ　カイドエ　デテ　オ
今みたいに　テレビも　何にも　ないし　みんなで　家の外に　出て　お
ジャミアソビオ　シタリ　ソンナコトバッカリシテ　アソンドッタ(1)モンデスワ。
手玉遊びを　したり　そんなことばかりして　遊んでいたものですよ。
アノ　ムカシワ　モスノ　キモノデ　ツクッテ　アズキ　イレテオクト　ネズミ
あの　昔は　モスリンの着物で　作って　小豆を　入れておくと　鼠が
カ゛　ヨル　デテキテ　ホイテ　カジッテクカ゛ヤ。　ヨー　ヨワッテワ　カーチャ
夜に　出てきて　そして　齧っていくのだ。　大変　困って　母ちゃん
ンニ　マタ　ヤブレター　マタ　ヤブレタッチュテワ　ツクッテモロトッタ(1)モン
に　また　破れた　また　破れたと言っては　作ってもらっていたもの
デス。フユワネ　ナーン　ウチニ　チントシテオレンモンヤサケ　ソトエ　デテ
です。冬はね　全然　家(の中)にじっとしていられないものだから外に　出て
ミソヤコ゛ッコオ　スルノデス。　＜以下省略＞
味噌屋ごっこを　するのです。）

(1) 石川・富山両県（福井県嶺北地方の一部）では共通語の「～ている・～でいる」にあたるものが～トル，～ドルとなります。

次に金沢名物「かぶら寿し」の店のご主人の金沢ことばです。

◆オキャクサンモー　コー　サムナッテクットー　キューニ　フエテキテー　カブラ
（お客さんも　こう　寒くなってくると　急に　増えてきて　かぶら寿し
モー　ツカッタカイネーッチュテー　クルカ゛ヤチャ[1]。<中　略>　イチカ゛
もう　漬かったかねと言って　来るんだよ。　1月
ツ　ニカ゛ツ　ユキカ゛　タクサン　イマーワ　アンマリ　フランケドネ。　ムカシ
2月　雪が　たくさん　今は　あまり　降らないけれどね。昔は
ャ　タクサン　フッタモンヤワイネ。　ホッデー　サムクナルシネー。　ドコーモ
たくさん　降ったものだよね。　それで　寒くなるしね。　どこも
シコ゛トニモ　イクドコモ　ナイシ　コダツンナカ　ハイッテ。ホイテ[2]　カーチャ
仕事に　行く所も　ないし　こたつの中に　入って。　そして母ちゃん
ン　ア　オマエントコノワ　ドンダケ　オイシナッタイヤッテー。　オー　ホンナ
あ　お前の所は（漬物が)どれだけ　おいしくなったのだって。　ああ　それな
ウチノァー　モッテクルローッチュテー　ホイテー　マー　ソノ　ツケモンオネー
ら　私の家のを持ってくるぞと言って　そして　まあ　その　漬物をね
オカシカ゛ワリニ　シテネ　オチャ　ノンダモンヤ。　ダイコ ニ　ニシンオ　ノセ
お菓子がわりに　してね　お茶を　飲んだものだ。　大根に　鰊を　のせ
タ　ニシンズシッチュノワ　ダ　ヤッタワケヤ。　<以下省略>
た　鰊寿しというのは　やったわけだ。)

(1) 文末の～チャは，富山県では似た使い方で今もよく聞かれますが，金沢ではあまり聞けなくなっています。

(2) ホイテはソシテ（接続詞「そして」）がホシテ，さらにホシテがホイテと変化したものです。ホシテがホイテとなるのは，サ行五段動詞「干す」でホシテ（干して）がホイテ（干して）とイ音便化するのと同じ現象です。

次は和菓子屋の三代目ご主人の金沢ことばです。

◆ニダイハンシュ　トシナカ゛サンノ　ジ　ジダイヤネー　ソンジブンニ　オカシヤ
（二代藩主　利長さんの　時代だね　その頃　お菓子屋
キチゾーサンテュー　ヒトカ゛　オイデタカ゛ヤネ。　ソノ　ヒトカ゛　ハジメテ　コ
のきちぞうさんという 人が　いらっしゃったんだよ。その人が　初めて　こ
ーユモン　ツクッタンヤケドモネ　エー　サンダイノ　トノサンノ　トシツネサ
ういうものを作ったのだけれどもね　三代目の　殿様の　利常さんが
ンカ゛　ハジメテ　オヨメサン　モラットキニ　ホンナー　アノ　コレワ　イーカ
初めて　お嫁さんを　もらう時に　そんな　あの　これは　いいか
ラ　アノ　トシ　トノサンカ゛　ツクッテ　アノー　オサメテクレッテ　ィテ
ら　あの　利…　殿様が　作って　あのう　納めてくれと言って そして
ハジメテ　エー　キチゾーサンカ゛　ツクッタ。　コレカ゛　ゴシキナマジューノ[1]

初めて　ええ　きちぞうさんが　作った。　これが　五色饅頭の
ハジメヤネー。　ン。　ホンナモンラ　ドコ　イッタカッテ(2)　**ナイ。　コレワ　ホ**
始めだね。　うん。そんなものは　どこに行っても　ない。　これは　本
ントノ　カナザワダケヤ。　＜以下省略＞
当に　金沢だけだ。)

(1) ゴシキマンジュー（五色饅頭）と言おうとしてゴシキナマガシ（五色生菓子）と言いかけたための発音と思われます。
(2) これと同様に，カイタカッテ（書いても），ヨンダカッテ（読んでも・呼んでも）のように使われて仮定条件を表します。

次は80歳を越えた３人のお年寄りの金沢ことばの会話です。普段着の金沢ことばが聞こえてきます。

A〔女　性1〕：コレワネー　アノー　クルトキニ　キテキテ　ソシテー　イロカ゛エノ
（これはねえ　あのう　嫁に来る時に着て来て　そして　お色直しの
トキニ　アノー　サッキノー　ワタシ　ヒトリデ　タテットッタ(1)　**アノ**
時に　あのう　さっきの　私が　一人で　立っていた　あの
シャシン。アノ　アズキイロノ。　デ　ツキ゛ニ　チャイロト　マタ
写真。　あの　小豆色の。　それで次に　茶色の着物とまた
イショーカ゛エ　スルンヤ。＜中　略＞　**ウーン。ソッデ　サンマイ…。**
お色直しを　するんだ。　うん。　それで　３枚。
I〔インタビュアー〕：ミナサン　アノ　ドナタモ　ソーヤッテ　オイロナオシサレタンケ。
（皆さん　あの　どなたも　そうやって　お色直しをされたのですか。）
B〔女　性2〕：アー　ワタシラ　ビンボニンヤサケ　ホンナコト　シェン。　ホント
（ああ　私など　貧乏人だから　そんなことはしない。　本当だ。
ヤ。　モンツキ　イチマイヤワネー。　ウーン。
紋付　１枚だよ。　うん。）
A：ソシテー　ホカニ　ハマジリメンノ　モンツキオ　オツイ　オツイコッテュカ
（そして　他に　浜縮緬の　紋付を　一対というかね
ネ　ニマイ　モッテッタン。　ワタシラノ　トキワ　キタカ゛ワ　ジンリキデ
２枚　持って行ったのだ。私たちの　時は　来たのは　人力車で
キタシ。　ワタシワ　ジンリキデ　キタカ゛ヤ(2)**。**
来たし。　私は　人力車で　来たのだ。）
B：ホヤ　コノヒト　ジンリキデ　キテ　ホイテ　コノサキノ　チョーチン　アッ
（そうだ　この人は人力車で　来て　そして　この先の　提灯が　あ
タヤロ…。
っただろう…。）

I：ウーン　チョーチン。　ンー。
（ええと　提灯。　うん。）
C〔女　性3〕：アンタ　ジンリキデ　キタン。ワタシ　ヤッパ　クロハイヤーヤッタ。
（あなたも人力車で　来たの。わたしはやはり　黒ハイヤーだった。）
＜中　略＞
A：ホイテ　モー　シゴ゜ト　イッポンノ　ヒトヤカラ　モー　ホンナモン　ネン
（そして　もう　仕事　一筋の　人だから　もう　そんなもの　赤ち
ネニ　チチ　ノマイトッテモ(3)　オソカッタラ　ネブッタリ(4)　シルト　ペシー
ゃんにおっぱいを飲ませていても時間が遅かったら　眠ったり　すると　ペシン
ント　ホーベタ　タタカレテ…。　＜以下省略＞
と　頬を　叩かれて…。

(1)「立つ」の意の五段動詞タテルにトルが後接してタテットルとなったものです。金沢以外にも北陸では富山（射水郡），石川（江沼郡），福井（若狭地方）などにタテルの形が分布します。

(2)「～のだ」にあたる形で，連体格の助詞「の」にあたるガ゜に指定・断定の助動詞ヤが後接したものです。～ガ゜ヤは伝統的な金沢ことばではきわめて使用頻度の高い文末表現で，本冊文字化部分にも多くの例が見られます。

(3) サ行五段動詞型のノマス（「飲ませる」の意）に「～ている」の意の～トルが後接したノマシトッテがノマイトッテとイ音便形になった形です。

(4) ビデオの字幕には「ねぶって」と出ますが実際にはこのように発音されています。

次はお寺の住職の節談説教の中で聞かれる，これも庶民的な金沢ことばです。

◆アッ　ゴエンサマ　セッキョーニ　イカント　ウチニ　ゴザッタ　キョーワ
（あっ　ご住職　説教に　行かないで私の家にいらっしゃった　今日
ナンヤッタンエネ。　トボケタヨーナ　カオ　シテ。　アリャー　イッカヤイネ。
はなんだったかね。　とぼけたような　顔を　して。　ありゃ　何日かね。
ジューゴニチヤカ゜。　アリャー　バーチャンノ　ショーツキメーニチヤッタンヤ。
15日だよ。　ありゃあ　お婆さんの　祥月命日だったんだ。
オ　イソカ゜シーモンニャ　ワスレトッタカ゜。　コンナヨナ　モンジャ(1)。モー
うん　忙しいものだ　忘れていたが。　こんなような　ものだ。　もう
サンジュップンホド　アトニ　キテクタンシェーネ(2)。　ハジモ　カカセマイト
30分ほど　後に　来て下さいね。　恥を　かかせまいと
オモテ　ホイテ　サンジュップンホド　アトニ　イキャー　テブシニ(3)　ホトケ
思って　そして　30分ほど　後に　行けば　手節に　仏様の
サンノ　マエオ　コーシテ。　ハナ　センケ゜ツカ　センセンケ゜ツノ　ボンニ
前を　こうして。　花は　先月か　先々月の　お盆に

アゲ゛タンカ。　ソノ　ハッパ　マダ　ツクエ　アノ　マエノ　アノ　オキョー
あげたものか。その　葉っぱがまだ　机の　　あの　前の　　あの　お経の
ホ　オイテアル　ウシロニ　マダ　ゴミァ　ノコットルカ゛ヤ。　ホイデ　オボ
　　置いてある　後ろに　　まだ　ごみが　残っているんだ。　それで　仏様
クサンモ　オー　ヒヤメシオ　コー　ムリニ　コー　モッタカ゛ヤ。　ミナサイ　ホ
に供えるごはんも冷や飯を　　こう　無理に　こう　盛ったんだ。　見なさい　仏
トケサマニ　アケ゛ランナイ(4)　**ゴボサマニ　ヨーナイモンジャサカイ。ゴボサマ**
様に　　あげるようなものではない。お坊さんには良くないものだから。お坊さんが
ドッカ　イッテ　ワルクチ　ユーテアルカナ。ホ゛デ　サンジュップン　タッテ
どこかに行って　悪口を　　言って歩かなければ（いいのに）。それで30分たって
イッタラ　ローソクモ　センコモ　タテテアルカ゛ヤ。チャント。　ゴエンサマ
行ったら　ろうそくも　線香も　　立ててあるんだ。ちゃんと。　ご住職は
オキョーサマエ　アケ゛サエ　エーカ゛。　ホ゛デ　コンドァ　オレァ　オキョー
お経さまを　　あげさえすればいいけれど。それで今度は 俺は　　お経を
アゲ゛ヨト　オモテネ　ガイモン　タタコッテュァ　ボーア　ナイカ゛ヤ。
あげようと 思ってね　鐘を　　たたこうとすれば棒が　　ないんだ。
オーイ　カーチャン　ゴエンサマ　ナンカ　タランモンナ　ナイケ。　ウラ(5)
おい　　母ちゃん　　ご住職　　何か　　足りないものはないかい。俺は
センコモ　ローソクモ　アケ゛トイタ。　オハナモ　カエトイタシ。　オマエ
線香も　　ろうそくも　あげておいた。お花も　　かえておいたし　お前は
ナンシトルカ゛ヤ。　イヤ　ゴエンサンニー　マッテモロタシー　イマ　ガスデ
何しているんだ。　いや ご住職に　　待ってもらったし　今　　ガスで
オチャ　ワカイトルカ゛デ　ハナ　ハナレラレンカ゛ヤトコト…。＜以下省略＞
お茶を　沸かしているので 側を　離れられないのだよ。

(1) 金沢ことばとしてはモンヤのように指定・断定の助動詞はヤになるのが普通ですが，このように男性を中心に稀に（語的に）ヤになる前の古い形ジャが聞かれることがあります。
(2) ～テクタンシェは「～て下さい」にあたる言い方です。ビデオの字幕には「くたんしいに」と出ますが，実際の発音はクタンシェーと聞こえます。
(3)「手節」とは「腕前，手並」の意味がありますので，ここでは「（お坊さんに）手並を見せるように（仏様の前をこうしてきれいに）」といった意味でしょうか。
(4) アケ゛ルカ゛ンナイ（上げるのでない）のルカ゛がラに音変化した形です。
(5) 福井県嶺北地方から石川県加賀地方に広く分布する「私」の意の自称代名詞です。現在金沢ではほとんど聞かれず，男性ではワシが一般的です。

次は三味線を作っている若い男性の金沢ことばです。年輩の人の話す金沢ことばとは少し違った，若い世代の金沢ことばの様子を聞くことができます。（以下，インタビュアー

のことばの文字化は省略しました。)

◆イヤ　ホンニンカ゛ヤルキカ゛アルトキワ　ヤル。ナイトキワ　ヤラン。オキャ
(いや　本人が　　やる気が　ある時は　　やる。ない時は　　やらない。お客
クサンニ　メーワク　カケルケドモ　シタクナイトキワ　ススマン　シコ゛トカ゛。
さんに　　迷惑を　　かけるけれども　したくない時には　進まない　仕事が。
トユノワネ　ナンデヤ　ユータラネ　ソ　ケッコー　オキャクサンニ　タノマ
と言うのはね　なぜかと　言ったらね　そう　けっこう　お客さんに　頼まれ
レテ　ムリシテ　ガンバル　ッタ　ジダイモ　アッタンヤワ。ホイタラー　アト
て　　無理をして　頑張った　　時代も　　あったんだよ。そうしたら　後
デミルトネー　ダメネンテ(1)　イヤイヤヤットル　ヤツワ。ホイタラ　マタ　ホノ
で見るとね　　駄目なんだよ　嫌々やっているものは。そうしたらまた　その
ボツニシテ　マタ　ヤランナンヤテ　キャクニワ　ワカランケド　イヤヤカラ。
没にして　また　やらなくてはいけないんだって　客にはわからないけれど　嫌だから。
ｲタラ　モ　ナントカ　マニアワセデ　マ　ソーユコトモ　マッタク　ナイトワ
そうしたら　何とか　　間に合わせで　まあ　そういうことも　全く　ないとは
ユワンケドネ　ヤッパリ　シャミセンチュカ゛　ハッキリ　ユーテネ　アマチュ
言わないけれどもね　やはり三味線というのが　はっきり言ってね　アマチュ
アカ゛　ツカッタバアイ(2)　オヤコサンダイ　ノコルト　オモウンネヤワ。ｲタラ
アの人が　使った場合　親子三代　　残ると　　思うんだよね。　そうしたら
ソコデ　チョット　イーカケ゛ンニ　シタヤツカ゛　イ　ズーット　アー　アレ
そこで　ちょっと　いい加減に　　したものが　　ずっと　　ああ　あれ
イヤーナ　ドーク゛ヤナッチュカ　エーエンニ　ノコッテシモーワケヤネ(3)。
嫌な　　道具だなというか　　永遠に　　残ってしまうわけだね。)

＜以下省略＞

(1) ダメナ＋ケ゛ン＋テの形が音変化したものです。形容動詞ダメヤの連体形と接続助詞テに挟まれたケ゛ンは，金沢ではほぼ50歳代以下の人に聞かれる文末助詞で，特に若い人たちの金沢ことばの中で使用頻度が高く，新しい金沢ことばの特徴の代表的なものとなっています。例えば以下のような使い方です。

・アシタ　エンソク　イクケ゛ン（明日遠足に行くんだよ）
・オナカ　コワシテ　タベレンケ゛ンテ（お腹をこわして食べられないんだ／食べられないんだって？）
・ソッチ　ユキ　フットルケ゛ンテ（そちらは雪が降っているんだって？）
・ドーシテ　コンナニ　アツイケ゛ンロ（どうしてこんなに暑いんだろう）

ここでは，ダメナにケ゛ンが後接することによって，ダメナのナの母音とケ゛ンのケ゛の子音が脱落しダメネンとなったものです。ケ゛ンはもともと伝統的な金沢ことばの文末部でよく使われた～カ゛ヤ（共通語の「～のだ」に近い意）が～ケ゛ーを経て～ケ゛ンに変化したものです。もっとも，能登地方各地の方言では金沢よりもず

っと早くに～ｶﾟヤから～ｹﾟンへの変化が起こっており，金沢方言としての内的な変化に加えて，すでに～ｹﾟンを使っていた能登地方の人たちの金沢への入り込みによる影響があったと思われます。この金沢の新しい文末助詞ｹﾟンの成立は，～ｶﾟヤと重なる意味用法を持つと同時に，独立した文末助詞として独自の意味用法を持つことになりました。形容動詞の連体形や指定・断定の助動詞ヤの連体形ナに続く場合には，ここでの例や以下の例のようにネンに変化し，また過去の助動詞タに続く場合には以下の例のようにテンに変化します。

・ワタシ　トマト　ダイキライネン（私トマト大嫌いなんだ）
・キョー　ガッコー　ヤスミネンテ（今日学校休みなんだ／休みなんだって？）
・イエ　スクﾟ　ソコネンケド　ヨッテカン（家すぐそこなんだけれど寄っていかない？）
・ナニ　シトッテン（「何をしていたの」の意。シトッタ＋ｹﾟン→シトッテン）
・イモートカﾟ　カッテキテクレテン（妹が買ってきてくれたんだよ）
・ワスレモンシテ　モドッテキテン（忘れ物をして戻ってきたんだよ）

(2) 年輩の人の金沢ことばならツコータとかツコタとなるところです。若い世代での共通語化の例です。

(3) ここでは(2)の共通語化とは逆で，ハ(ワ)行五段動詞型の～テシマウのシマウ（連体形相当の形）が年輩の人たちと同じようにシモーとなっています。

次は，川釣り用の毛針を50年間作っているという女性の優しい語り口の金沢ことばです。

◆ヒトマキ　ヒトマキネ　コンナコト　シテー　トメテカンナカﾟヤゾ[1]。　エート
（一巻き　一巻きね　こんなこと　しては　止めていかなければならないんだよ。ええ
ネー　ゴジューネン　ホ　クライン　ナリマスワ。　ウン　ケバリバッカリ。
とね　50年　くらいに　なりますね。　うん　毛針ばかり。
アノ　ハリフノ　ムスメヤカラ。　ダカラネー　アノー　ウマレタトキカラ
あの　針夫の　娘だから。　だからね　あのう　生まれた時から
オシコﾟトノ　ヒトカﾟ　ナンニンモ　イラシテー　ワーワート　ニギﾟヤカーナ
お仕事の　人が　何人も　いらして　わあわあと　賑やかな
ナカデ　ソダッタモンデ　ヘヤジューネ　ケダラケニシテ　オシコﾟト　センナ
中で　育ったもので　部屋中ね　毛だらけにして　お仕事を　しなくては
ンカﾟヤ。　ダカラネー　ナッカナッカ　ホノ　ザイリョーアツメカﾟ　ヤッパリ
いけないんだ。だから　なかなか　その　材料集めが　やはり
タイヘンデネ。　ホンナカﾟヤテ[2]。　ホンナンヤッテ。　ホンナカﾟヤテー。
大変でね。　そうなんだよ。　そうなんだって。　そうなんだよ。）

(1) トメテイク（止めていく）から変化したトメテクの未然形トメテカ＋ンナン（～なければならない）＋ｶﾟヤ（のだ）＋ゾ（よ）の形が音変化したものです。

(2) ホンナカ゜ヤは比較的親しい間柄で使われる相づちことば。この場合は自分で言ったことに対して自分自身で念押しするかのように重ねて使われています。すぐ後ろのホンナンヤッテもほぼ同じような意味です。

次は和傘づくりの職人さんの金沢ことばです。

＜前半省略＞

◆ウーン。　マ　ホノ　ジブンナ　ユーメーヤッタンヤケドネー　イマワ　モー
（うん。　まあ　その　頃は　有名だったのだけれどもねえ　今は　もう
ジダイ　スンダモンヤカラネー。　ホイテ　アノ　ムカシワ　オトクイサンチュ
そういう時代は終わったものだからねえ。それで あの　昔は　お得意さんといっ
テネー　ヒジョーニ　ダイジニ　シタモンヤワイネ。　ホヤサケ　アノ　オショ
てねえ　非常に　大事に　したものだよね。　だから　あの　お醤油
ーユヤサントカネー　オサケヤサントカデモ　ミンナ　チョット　ノキシタエ
屋さんとかね　お酒屋さんとかでも　みんな　ちょっと　軒下へ
アメニ　フッタサイナ(1)　**スク゜　バンカ゜サ　カシテクレタモンヤ。　ホイデ**
雨に　降ったに時は　すぐ　番傘を　貸してくれたものだ。　それで
ホノ　バンカ゜サニワ　ミンナ　ホコノ　ナマエ　カイトッタモンヤ。　サカナ
その　番傘には　みんな　そこの　名前を　書いていたものだ。　魚屋さ
ヤサントカネー　ミソヤサントカー　ウーン。　＜中略＞
んとかね　味噌屋さんとか　うん。）
◆コリャー　ムカシーカラ　アッタモンカ゜　ナクナルッチューコトワ　アイソン
（これは　昔から　あったものが　なくなるということは　淋しい
ネー(2) **コトヤト　オモテー　ホイデ　コサエトルンヤケドネー。**
ことだと　思って　そして　作っているのだけれどねえ。）
◆ソーソー　オンナノコワ　オハナデー　オトコノコワ　オウマデネー。　ホコニ
（そうそう　女の子は　お花で　男の子は　お馬でねえ。　そこに
ツクッテル　ホレ　ホーヤカ゜イ(3)　**イマ　マダ　デキン　シアカ゜ットランケレド。**
作っている　ほら　そうだよ　今は　まだ　できない仕上がっていないけれど。）

＜以下省略＞

(1) フッタサイニワ（降った際には）のサイニワが音変化した形です。

(2)「愛想ない」に由来する語で，金沢ことばではここでの「淋しい」の意のほか「冷淡な」「面白くない」などの意味でも使われる形容詞です。また，金沢ではアイソラシー（「愛想らしい」）という形容詞を「優しい」「思いやりのある」「かわいい」などの意味で使っています。

(3) 伝統的な金沢ことばの文末助詞として頻繁に用いられます。ビデオ第三部に登場する方言詩「いいがいね」の「がい」も同じものです。文末詞の意味を共通語に置き

かえるのは難しいのですが「～だよ」に近い意味を持つものです。文末助詞ネを下接してｶﾟｲネの形でもよく使われます。文末助詞ｶﾟｲは石川県だけでなく福井県嶺北地方などでも使われています。

今度は駅弁づくりでも知られる市内の料亭のお女将さんの金沢ことばです。

＜前半省略＞

◆オイネ。　ベテランサンバッカリ　オイデルヤロ。ソノ　ジブンナ　ホーヤネー
(そうだよ。ベテランの人ばかりいらっしゃるだろう。その　頃は　そうだねえ
オトコノ　ヒトワ　チョーヘーニ　イッテ　イナイシ　オテッタイ(1)**スル　ヒト**
男の　人は　徴兵に　行って　いないし　お手伝いする　人と
ッタラ　タラ　ワタシ　ココノ　イエノ　オジサンレンジュー　マ　ミンナ
いったら　私だけ　ここの　家の　おじさん連中は　まあ　みんな
キノハル　ヒトバッカリ。　ソンナカニ　ダマーッテ　コ　ツメトランナンヤロ。
気の張る　人ばかり。　その中に　黙って　こう　弁当を詰めていなくてはいけないだろう。
カラｹﾟンナンヤロ。　チョッコデモ　ヘシナケリャ(2)**　オイ　ナンシトル　ヘシナ**
しばらなくてはいけないだろう。　少しでも　遅ければ　おい　何をしている　遅
ｲカﾟｲヤ(2)**　ハヨラト**(3)**　センカイヤッテ　コンナンヤシ　シカラレンナンシネー。**
いよ　早く　しないかと言って　こんなんだし　叱られなくてはならないしねえ。
メージサンジューイチネンカラ　タダノ　イチニチモ　カカシタコトナイ。　ソ
明治３１年から　ただの　１日も　欠かしたことがない。そ
レダケ　マ　キシャニ　シコﾟトト　イーナカﾟラ　キツイモンヤネ。　ン　キツ
れだけ　まあ　汽車に　仕事とは　いいながら　大変なものだね。　うん　大
イモンヤネ。　セナ　チャーツカンカﾟイネー(4)**。**　＜以下省略＞
変なものだね。しなくては　しょうがないねえ。)

(1) テツダイのツが促音化にともなってダがタに変化した形です。金沢ことばではこの例に限らず語的に促音化の例が多く見られることも特徴の一つです。
(2) いずれも形容詞ヘシナイが含まれる形で，前者はヘシナイの仮定形，後者はヘシナイカﾟイヤの２つのイがやや不明瞭な聞こえとなったものです。
(3) 金沢を含む加賀地方の一部の方言では，ハヨーラト（早く），オソーラト（遅く），タコーラト（高く），アカルーラト（明るく），マルーラト（丸く）のように，一部の形容詞の連用形（西部方言的なウ音便形）に接尾辞ラトが後接して副詞的に用いられる特徴が見られます。
(4) チャーツカンは「話し合いで決着できない」「どうにもならない」などの意でも使われます。

次はある八百屋さんの店頭での客と店の人のやりとりです。少し聞き取りにくい部分も

ありますが，一部を文字化しました。

＜一部省略＞

A〔八百屋〕：アッ　ハクサイジャ。
（あっ　白菜だ。）

B〔客1〕　：イーノ　ハイットッケ(1)。
（いいのが　入っているか。）

A：シュンギ゛クカ゛　イーゾ　ヒトツモ　ドーヤエ。
（春菊が　いいぞ　一つも　どうだい。）

B：アー　ホントカ　ホンナラー　ナベニ　スッカナ(1)オジサンニ　ユータトーリ。
（ああ　本当か　それなら　鍋に　するかな　おじさんに　言ったとおり。）

A：ホンナ　ハクサイニ　シュンギ゛クヤロー。
（それなら　白菜に　春菊だろう。）

B：アト　シータケ。
（あと　椎茸。）

＜中　略＞

A：ジャカ゛イモカ。
（じゃが芋か。）

C〔客2〕：ジャカ゛イモ　アンマリ　デカイカ゛　イランワ。
（じゃがいもは　あまり　大きいのは いらないよ。）

A：チーサイ　チーサイ　チーサイノー。
（小さい　小さい　小さいのを。）

C：チョット　チッチャミノカ゛。
（ちょっと　小さめのが。）

A：コレカ。
（これか。）

C：コンナトコヤネー。
（こんなところだねえ。）

＜中　略＞

A：ソー　ア　マエダサン　イツモ　キノドクナネー(2)　アンヤト(2)　アンヤト。
（そう　あ　前田さん　いつも　すみませんねえ　ありがとう　ありがとう。
ヤーチュワント　ドーゾ　ドーゾ。
嫌と言わないで　どうぞ　どうぞ。）

D〔客3〕：ヤーワ。
（嫌だ。）

A：ナン　ナンニ　シマスカ。　キノドクナネー。
（何　何に　しますか。　ありがとうね。）

C：オトーフ　ヒトツ。
（お豆腐を　一つ。）
A：アッ　トーフ　アイッ。　＜中略＞　**キノドクナー。**　＜中略＞　**ハイ　トー**
（あ　豆腐　はい。）　（ありがとう。）　（はい　豆腐
フネ。　ハイ　トーフニ　ハッサクニ。　＜中略＞
ね。　はい　豆腐に　八朔に。）
B：ホンダケデ　エーワ。　＜中略＞
（それだけで　いいよ。）
A：ハイ　ホンデ　イーカ。　アンヤトネー　イツモネー　キノドクナー。
（はい　それで　いいか。　ありがとうね　いつもね　ありがとう。）
＜以下省略＞

(1) ハイットルケのルが促音化したものです。すぐ後にあるスッカナも同様にスルカナのルの促音化の例です。
(2) ここでは，ビデオ第二部のタイトルにもなっている金沢ことばの代表的な感謝の意の挨拶ことばであるアンヤトとキノドクナが立て続けに店の人の口から飛び出しています。アンヤト，キノドクナの説明は先述の部分を参照して下さい。

次はある三世代同居家族の夕食時の会話です。ここでも声が重なって聞き取りにくい部分がありますが，家族間で普段着の金沢ことばが飛び交います。中の一部の会話をひろってみます。昭和38年１月のいわゆる「38豪雪（サンパチ）」の話題から始まります。

A〔祖母〕：マ　ムカシホド　フッタケドー　ネー　サンパチトカ。
（まあ　昔ほど　降ったけれど　ねえ　38とか。）
B〔娘1〕：ナンヤ　サンパチッテ。
（何だ　38って。）
A：サン　ン　サンジューハチネン。　ネーチャンノ　ウマレタ　トシ　サンジュ
（3　ん　38年。　姉ちゃんの　生まれた　年　35年の
ーゴネンドキャ　ナー　オショーガツモ　ナーンニモ　ユキオロシヤ。　サン
時は　ねえ　お正月も　何も　雪下ろしだ。　35年
ジューゴネンノ　クレ。
の　暮れ。）
B：ムカシ　アタママデ　ユキ　アッタノ　シットルヤロー　カズ…。
（昔　頭の高さまで雪が　あったのを知っているだろう　カズ…。）
C〔娘2〕：シットルヨ。
（知っているよ。）
D〔父〕：ワシラ　サンパチントキッテ　アレヤロー　シジマヤサンノ　アノ
（私たち　38の時って　あれだろう　四十萬屋さんの　あの

アノヘンマデ　ユキ　アッタモンナ　カイダン　ツクッテ　ヒト　ヒトリ
あの辺まで　雪が　あったものね　階段を　作って　人　一人が
アルクカ゜[1]　ヤットヤッタモンナ。
歩くの　やっとだったものね。)

B：ドコマデ。
(どこまで。)

D：シジマヤサンノ　アノ　ミセノ　ドッカ　アノヘンマデー　ミチ　コー　アノ
(四十萬屋さんの　あの　店の　どこか　あの辺まで　道を　こう　あ
ー　カイダン　ツケテー。
の　階段を　つけて。)

C：ウソヤー。
(うそだ。)

A：ニカイカラ　デハイリ　シタンヤ。
(2階から　出入り　したんだ。)

D：アレワ　ワシカ゜　チューカ゜クサンネンノ　トキヤ。
(あれは　俺が　中学3年の　時だ。)

＜中　略＞

E〔祖父〕：ホヤケド　イマー　コレデー　ヤネユキ　オロイテモ[2]　イマデァ　コノ
(だけど　今は　これで　屋根の雪を下ろしても　今では　この
サーッサト　アノ　ユーセツソーチヤラ　アンナモンナ　アルサカイー。
さっさと　あの　融雪装置や　あんなものが　あるから。)

＜中　略＞

イッペンニー　イチメータモ　ソコイラモ　フリャー　アレヤケドー。
(一度に　1メートルも　そのあたりも降れば　あれだけれど。)

D：ホンデ　ヤッパ　ホントニ　フランカ゜ニ　ナッタッチューコトヤ。
(それで　やはり　本当に　降らないようになったということだ。)

E：ホントヤ　フランヨン　ナッタモン。
(本当だ　降らないようになったもの。)

C：ウチンチ　ヤネユキオロシトカ　シタコト　アルカ゜。
(うちは　屋根の雪下ろしとか　したことはあるの。)

D：ウッチャ　イチバンサキニー　チョーナインナカデ　イチバンサキニ　ユキオ
(うちは　一番先に　町内の中で　一番先に　雪下
ロシヤッタンヤ。
ろしだったんだ。)

＜以下省略＞

(1) ここでのカ゜も先述の連体格の助詞「の」にあたるものです。ここの会話部分では他に「アルクカ゜　ヤットヤッタモンナ」「フランカ゜ニ　ナッタッチューコトヤ」

「ヤネオロシトカ　シタコト　アルカ゜」の部分に同様のカ゜の例が見られます。

(2) これも先述のように，サ行五段動詞オロス（下ろす）のイ音便形です。

5．第三部「ことばは町しるべ」にみる金沢ことば

第三部では，まず前半で，金沢の町の風景とそこで暮らす人々の金沢ことばを訪ね，後半では，金沢ことばのルーツの一つである京都のことばを訪ねています。

まず最初に，金沢の生んだ文豪泉鏡花の作品「寸情風土記」の一節の朗読があります。中にハベン（蒲鉾），フカシ（はんぺん）という食べ物の方言が登場します。次に加賀鳶の伝統を受け継ぐ消防団の男性が登場しますが，インタビューに答えてやや改まった感じの金沢ことばになっており，文字化は省略しました。また，次の里見町に住む「町の歴史を語る会」を主宰する女性の話の文字化も省略しました。この女性の話に出てくる金沢ことばのうち，ビデオの字幕で「まどわんなん」に「弁償する」と出る部分については，「弁償する」の意は動詞マドー（マドウ）にあたるもので，マドワンナンはマドーの未然形マドワにンナン（～なければならない）が後接した形です。また，イクコトナランは「行っては行けない」の意味で，カクコトナラン（書いてはいけない），ミルコトナラン（見てはいけない）のように，動詞の連体形にコトナランが後接して「～てはいけない」という強い禁止を表します。

次は野町で津田流水引の店を継いだ女性のことばです。女性らしいゆったりした優しい金沢ことばが聞かれます。

◆ココエ　ミセー　シテ　スク゜　コドモ　マダ　チーサイコロヤッタカラー　ア
（ここに　店を　出してすぐの頃は子供がまだ小さい頃だったから　あ
ノ　キンジョニモ　ソー　シッタ　シトモ　オイデンシネ。　ホヤカラー　ナン
の　近所にも　そう　知っている人もいらっしゃらないからね。だから　何
カ　アルト　コドモ　フタリ　ツレテー　サイカ゜ワノ　オーハシ　イッテ　ホ
か　あると　子供　二人を　連れて　犀川の　大橋　行って　そ
イデ　アノー　ミツコージヤマノ　ホーコー　ミルトー　メーカ゜(1)**　スッキーリ**
れで　あのう　三小牛山の　方向を　見ると　目が　すっきり
スルンヤワネ。　エー　ホイデー　ナンカ　イロンナコトオ　カンカ゜エルカ゜デ
するんだよね。　ええ　それで　何か　色々なことを　考えるのでも
モ　アノ　ボンヤーリ　スルカ゜デモ　トニカク　サイカ゜ワノー　フチエ　ヨ
あの　ぼんやり　するのでも　とにかく　犀川の　縁へ　よ
ー　アノ　イクシネー。　カナザワノ　ヤッパリ　モー　イチバンノ　キョー
く　あの　行くしねえ。　金沢の　やはり　もう　一番の　郷愁だ
シューヤト　オモウネー。

と　　思うねえ。

(1) ここの場合のように目がメーと発音され，ほかにも手がテー，血がチーのように，1音節語が長呼されるのは，近畿方言に共通する北陸方言の特徴です。

次は，笠舞に住む女性詩人が自作の方言詩集『いちくれどき』の中の「いいがいね」という詩を朗読しています。自分の気持ちを率直に伝えるには方言しかない。方言詩を作っている方たちに共通する気持ちなのかもしれません。

◆イーカ゛イネ　イーカ゛イネ　ベンキョ　センカテ(1)　イーカ゛イネ。アンナケ(2)
(いいじゃない いいじゃない　勉強　しなくてもいいじゃない。　あれだけ
ウマソニ　アサハン　タベテ　ヒルメシ　タベテ　ヨナカ゛(3)　タベ　アンナケ
おいしそうに朝ご飯を食べて　昼ご飯を　食べて　晩ご飯を　食べ　あれだけ
クローナルマデ　アソンダルイテ(4)　ハナンタマニ　アセ　カイテ　ホイカラ
暗くなるまで　遊んで歩いて　鼻の頭に　汗を　かいて　それから
ニコーット　ワロテマッシャン(5)。　カワラシ　クチ　アケテ　ネブッタ　カオ
にっこり　笑ってごらんなさい。　かわいらしく口を開けて　眠った　顔を
ミテンマッシャン(5)。ナーンモ　ユーコト　ナイカ゛イネ。　イーカ゛イネ　イー
見てごらんなさい。　何も　言うことはないじゃない。いいじゃない いい
カ゛イネ　ベンキョー　センカテ　イーカ゛イネ。
じゃない　勉強　しなくてもいいじゃない。)

(1) ～カテ（～カッテ）は条件を表す接続助詞で，ここでは共通語の「～ても」にあたる意を表します。
(2) アンダケのダがナに変化した形です。
(3) 中世末頃「夜なべ仕事をしている人の夜の間食」の意味で京都で使われていた「よながり（よながれ）」が石川・富山に伝わり，ヨナカ゛の形で夕食を意味するようになったと思われます。
(4) アソンデアルイテのデアがダに変化した形です。
(5) 金沢を中心に，南は小松市，北は口能登から富山西部の一部にまで，尊敬の助動詞マサル系（マサル・マッシャル・マシャル）が分布しますが，ここでは，前者がマッシャルの終止形マッシャルの末尾ルがンに変化したもの，後者が命令形マッシャイのイがンに変化したものと考えられます。

次は再び東の茶屋街に戻ります。茶屋のお女将と芸妓の二人の会話です。

＜前半一部省略＞

A〔女性1〕：ホンナ　ホノ　ジブンナ　ネ　アノ　コノ　ヒカ゛シノ　オードーリワ
（そんな　その　頃には　ね　あの　この　東の　大通りは
ムカイ　モー　ムカイト　コッチ　ゼンブヤロ。　ホノ　ウラドーリモ

向かい　もう　向かいと　こっちの全部だろう。　その　裏通りも
ズット　アッタン　オチャヤカ゛。
ずっと　あったんだお茶屋が。)
B〔女性2〕：ゼーンブ　オチャヤサン。
(全部　　お茶屋さん。)
A：エ　アッチノ　サンバンチョーモ　ムカイアワセニ。
(え　あっちの　三番丁も　　向かい合わせに。
B：ソヤ　ソヤ　ソヤ。
(そうだ　そうだ　そうだ。)
A：ズーット　ヤッパー　アッタワネー。
(ずっと　やはり　あったよねえ。)
B：アンデ　ロクヒチジュッケン　アッタカ゛ヤロ。
(あれで　六,七十軒　　あったんだろう。)
A：ソーヤー。
(そうだ。)
B：ウーン。　タクサン　アッタワケヤ。
(うん。　たくさん　あったわけだ。)
A：マ　ソノ　ゲーコサンモー　ヒャクゴジューニンホド　イラシタヤロー。ネー。
(ま　その　芸妓さんも　150人ほど　いらしただろう。ねえ。)
B：マイツキ　マイドシ　オショーカ゛ツニ　シコ゛ニンズツ　デタモンネ。
(毎月　毎年　お正月に　四,五人ずつ　出たものね。)
A：ソーヤ　ソヤ。ジミショデ　アッタカ゛イネ。ネー　シンネンカイ　デテ
(そうだ　そうだ。事務所で　あったよね。　ねえ　新年会に　出て
ソノ　トシニ　デタ　シンバナサンカ゛　オザシキ　ダシテ。
その　年に　出た　新花さんが　お座敷を　出して。)
B：ソーヤ　ソヤ　ソヤ。
(そうだ　そうだ　そうだ。)
A：ミンナ　コンナー　オベント　ハンケ゛ツベントミタイナモン　オチャヤサン
(みんな　こんな　お弁当　半月弁当みたいなものを　お茶屋さんが
ネー。　ソンダケ　アツマルホド　オチャヤノ　カズモ　タント　イラシタモンネ。
ねえ。　それだけ　集まるほど　お茶屋の　数も　たくさん　いらしたものね。)
B：タクサンヤッタ。
(たくさんだった。)
A：オキャクサン　オイデタトキワー　イマデモー　アラー　ヨーコソ　オイデア
(お客さんが　いらっしゃった時は今でも　あら　よく　いらしゃ
ソバセッテ　ワタシラ　ヤッパリ　シャントー　ゴアイサツ　ゲンカンデ　ム
ったと言って 私たちは やはり　ちゃんと　ご挨拶を　玄関で　迎

カエルトキ　ユーワネー。　ゲーコサンラー…。
える時に　　言うよね。　　芸妓さんたち…。)
B：ワタシラモー　ニカイ　アガッタラ　アーラ　ナガイコッテー　ドーシテ
(私たちも　　2階へ　上がったら　あら　　お久しぶりで　　どうして
オイデタンケ　タッシャヤッターッテ　コー　ユーガヤ。
いらっしゃたのか　お元気だったかって　こう　言うのだ。)
A：ホーヤロネー。
(そうだろうねえ。)
B：ホイテ　キノー　オータガデモ　ナガイコッテーッテ　コー　ユワナ。
(そして　昨日　　会った人でも　　お久しぶりでって　　こう　言わなくては。
A：ホーヤロネー。
(そうだろうねえ。)

先述したとおり，茶屋街や町屋で接客ことばとして使われた「オイデアソバセ／オイデアスバセ／オイダスバセ」は，かつて京都で使われていたことばが金沢に伝わったものと考えられます。このことからもわかるように，金沢のことばをはじめ北陸のことばは，長く京都方面のことばの影響を受けながら変化してきたものです。したがって，当然のことながら単語や文法，表現などで京都に代表される近畿地方のことばとの共通点が多くなります。

ビデオでは次に京都の嵯峨野付近に住む母と娘の会話が登場します。文字化は省略しましたが，ゆったりとした調子で語られる京ことばの中に金沢ことばとの共通点を探してみて下さい。キレーヤッタナー（きれいだったねえ），スキヤワー（好きだよ），　ソーヤナー（そうだねえ），ナントノー（何となく），オワッタオモタラ（終わったと思ったら），キゼワシナルナ（気ぜわしくなるね），ナントユーテモ（何と言っても），オーイサカイ（多いから），シトカントナ（しておかないとね），ボンチヤサカイ（盆地だから）の下線部に，金沢ことばとの共通性を見つけることできるでしょう。

次に京都の西陣織の織り手である男性の話も登場しますが，インタビューに答えてやや固い説明的表現が多くなっています。先の女性二人の会話に比べると話のテンポは少し早くなりますが，登場する京ことばに取り立てて説明を要するものはありませんので，これも文字化は省略しました。

場面は再び金沢に戻って，今度は西の茶屋街です。茶屋のお女将で横笛の師匠もしている女性の，ざっくばらんで元気のよい金沢ことばを聞くことができます。

◆〔弟子に向って〕コレガ　ナカノータカネ　ハイ　ヤッテマッシ[1]**。**
(これが　中の高音だ　　はい　やってごらんなさい。)
◆キノドクナネ　ハヤ　オマタセシテ　ゴメンネ。　ホヤネー　ヤッパ　ワタシラ

(すみませんね　まあ　お待たせして　ごめんね。　そうだね　やはり　私たちの
ノー　ジブンワー　ヤッパリー　モー　ダレニモ　マケラレン。モー　ジブンノ
頃は　やはり　もう　誰にも　負けられない。もう　自分の
モンニ　シヨト　オモテー　ホイテ　オ　ヤ　オッショサンノ　トコロエ　ハシ
ものに　しようと思って　そして　お師匠さんの　所へ　走っ
ッテイッテー　ソノ　オッショサンノ　ゲーオ　ドーカシテ　ヌスンデヤロート
て行って　その　お師匠さんの　芸を　どうにかして盗んでやろうと
オモーケドモ　イマノー　オデシサンワ　アノー　コッチガ　イッショケンメ
思うけれども　今の　お弟子さんは　あのう　こっちが　一所懸命
オシエテアゲテモー　ワタシ　コレイジョー　デキンワッテ　イエバ　ソンデ
教えてあげても　私　これ以上　できないわって言えば　それで
オワリヤシ。　ソレカラ　ヨクシテ　ナラウコワ　ヤッパ　ウマクナッテクシネ。
終わりだし。　それから　欲を出して習う子は　やはり　上手くなっていくしね。
エー。　ソンダケノ　ヤッパ　チガイヤネ。　エー。　ホイカラ　ヤッパ　タク
ええ。　それだけの　やはり　違いだね。　ええ。　それから　やはり　たく
サン　オデシサン　オイデルケドモ　ヤッパリー　ジョーズナコワ　アノー
さん　お弟子さんがいらっしゃるけれども　やはり　上手な子は　あのう
ケーコニ　コンデモ　イーカオト　オモウホド　キマス。　ホイカラ　アーンナ
稽古に　来なくてもいいものをと思うほど　来ます。　それから　あんなも
モン　アラ　アノコ　クリャーエーカオナート　オモートッテモ　アノー　ネ
の　あら　あの子　来ればいいのになあと　思っていても　あのう　ねえ
ー　マー　コレンチュテ　イソカシカラ　コレンカカネ。　マ　ソーユーヨナ
まあ　来れないと言って忙しいから　来れないのかね。　ま　そういうような
トコ　マタ　チコーネ。　エー。
所が　また　違うよね。　ええ。)
◆オー　ワタシラ　ターボーノ(2) **ジブンニ　アノ　ジブン　サイカワ　モ　ワタ**
(うん　私たち　芸妓見習いの頃に　あの　頃　犀川に　も　私は
シワ　アビニイッタワイネ。　アビニイッタッテ　ワカルカネ。　ア　オヨキ
水を浴びに行ったんだよ。　浴びに行ったって　わかるかな。　あ　泳ぎに行
ニイッタカヤネ。　ネー。　アノ　アビニイッタゾイノ(3)　**ワタシラ。　ホイテ**
ったんだね。　ねえ。　あの　浴びに行ったんだよ　私たち。　そして
ー　アノー　イッパイ　サクナ　サカナ　オッタヤロー。　デ　ワテァ　コドモ
あのう　いっぱい　魚　魚が　いただろう。　それで　私が　子供の
ノ　ジブンニ　ヨー　イッテー　ホイテ　ナー　カエッテクットー　オッカサン
頃に　よく　行って　そして　ねえ　帰ってくると　お母さん方
カタニ　シカラレテネー。　マー　ソ　ソノ　ムカシワ　ソーユー　ユーカヤ
に　叱られてねえ。　まあ　その　昔は　そういう　優雅だった

ッタネ。　オモテデモー　ジントリ　シタシ　アソンダリ　シタリネー。　イマ
ね。　表でも　陣取り　したし　遊んだり　したりね。　今は
カワイソヤネ　コノコ゜ロノ　コドモワネ。アノ　ホンナー　モー　ジントリナ
かわいそうだね　この頃の　子どもはね。あの　そんな　もう　陣取りなん
ンカ　デキンシ。　ムカシ　ケンパッチュモン　アッタ　シルマサンケ(4)**。ケン**
か　できないし。昔　ケンパという外遊びがあったのご存じないですか。
パッチュモン　アッテネ　ヤッパネー　ターボデ　ンダ　ターボ　ゼンブ　ゼン
ンパという遊びがあってね　やはりね　芸妓見習いで　女の子　全部　全部
ブ　ヨセテネー　アソブゾーッチュトネ　ワ　バン　ターボノ　ジユーナ　ジ
集めてね　遊ぶぞって言うとね　芸妓見習いの　自由な　時
カンチュタラ　オソージカ゜　スンダラ　ジューニジカラ　タイテー　ヨジコ゜
間といったら　お掃除が　済んだら　12時から　大抵　4時頃ま
ロマデ　ヒマナンヤネ。　ホンデ　ソノ　ジブンカ゜　ソノ　ターボノ　アソビジ
で　暇なんだね。　それで　その　頃が　その　芸妓見習いの遊び時
カンヤネ。　エー。
間だね。　ええ。

(1) ビデオの字幕では「やってまっし」と出ていますが，実際にはヤッテ゛マッシのように発音されています。ヤッテ゛マッシのンはミが変化したものです。マッシは先述のとおり尊敬の敬語助動詞マサルの命令形に相当するものです。現在金沢では年輩の人たちの間でマサルが主に使われ，同じマサル系のマッシャル・マシャルは金沢の周辺部で使われます。マサル・マッシャル・マシャルは，本来「書く」「読む」などの五段動詞では終止形（連体形も同形）に，ここでの「見る」や「起きる」「寝る」などの一段動詞とサ変・カ変動詞では連用形に後接しました。しかし，共通語の敬語の普及にしたがいマサル系助動詞は段々使われなくなり，現在では命令形のマッシだけが比較的よく使われています。これは，共通語の尊敬表現では命令形が使いにくいために，その体系のすき間をマッシが埋めていると考えることができます。共通語にはない優しい命令の言い方（敬意は感じられない）として～マッシが重宝がられているわけです。しかも，五段動詞への接続も一段動詞などと同様に連用形に一本化（頑張ルマッシ→頑張リマッシ）しつつあります。最近は金沢らしさを出すためのキャッチフレーズとして「キ(来)マッシ」「タ(食)べマッシ」など，～マッシを使った言い方が，あちこちで盛んに使われています。

(2) 金沢ではターボとはもともと「よその家の小さい女の子」をさす言い方だったようです。それが茶屋街で「芸妓見習いの小さい女の子」をさす言い方として転用されたものでしょう。

(3) ～ガイネなどとともに金沢ことばの特徴的な文末表現の一つです。～ゾイノのほか～ゾイネの形もよく聞かれます。

(4) マサランケのラが脱落した形。(1)で述べた尊敬の敬語助動詞マサルが否定のンと結

びついてマサランとなったものです。ケは，これもすでに述べたとおり疑問の終助詞です。

以上ここまでは，主に年輩の人たちの金沢ことばが登場しましたが，次に地元のアマチュア劇団の舞台から若者の金沢ことばについて見てみましょう。この劇団は1995年の暮れに全編を金沢弁のセリフで通した作品を上演し話題になりました。その後この劇団は再び金沢弁をギャグや笑いの素材として舞台にのせたギャグライブを上演しました。このように，地元の若い人たちが方言を舞台にのせ，全国的には知名度の低い金沢ことばを外に向かって発信しようという試みは，最近の方言見直しの流れの中で大いに注目されるものです。

A〔男1〕：ホントワ　ナンシトラン[1]**。**
（本当は　何をしているの。）
B〔男2〕：サラリーマン。ヨメサント　コドモ　カカエテ　キューキューヤ。
（サラリーマンだ。嫁さんと　子どもをかかえて　汲々の生活だ。）
C〔女〕：ナンカ　タイヘンソーデスネー。
（何か　大変そうですね。）
B：キムラ　マダ　ドクシンデ　ミカ゜ルデ　イーヨナー。
（木村は　まだ　独身で　身軽で　いいよなあ。）
A：ダラ　ワシ　モー　サンジューヤゾ。
（馬鹿　俺　もう　30歳だぞ。）
B：ワシモヤッテ。
（俺もだって。）
C：ワタシモ　モー　ニジューキューデスヨ。
（私も　もう　29歳ですよ。）
B：ナー　ナー　オマエラ　マダー　プロレス　ミニイットル。
（なあ　なあ　お前たち　まだ　プロレスを見に行ってるか。）
A：イケルワケネーカ゜イヤ[2]　**モー　サンジューヤゾ。**
（行けるわけないじゃないか　もう　30歳だぞ。）
C：ワタシモ　ケッコンシテカラワ　イッテナイデス。
（私も　結婚してからは　行ってないです。）
B：ヒサビサニ　プロレス　ミテーナー。　ナー　コンド　イッショニ　イカンケ。
（久々に　プロレスを見たいなあ。　なあ　今度　一緒に　行かないか。）
C：イーデスネ　キムラセンパイモ　イッショニ　イキマショーヨ。
（いいですね　木村先輩も　いっしょに　行きましょうよ。）
A：ヤメトクワ。ジカンモ　ナイシー　ナンカ　カイジョー　イッテモ　フンイキ
（やめておくよ。時間も　ないし　何か　会場に　行っても　雰囲気

チコ゜ーシナ[3]。
違うしな。)
B：モー　サンジューヤシナ。
(もう　30歳だしな。)
A：コンナハズジャ　ナカッタンヤケドナー。
(こんなはずでは　なかったんだけれどなあ。)
C：ソーイエバ　ワカマツセンパイ　オソイデスネ。
(そういえば　若松先輩　　遅いですね。)
B：アー　アイツ　カワッテネーナ。
(ああ　あいつ　変わってないね。)
A：ワカマツッテイヤー　ダイカ゜クントキ　シンケ゜キ　ミニイクカ゜ンデ[4] マチ
(若松と言えば　大学の時に　新劇を 見に行くというので　待ち
アワセ　シトッタラ　イチジカンハンカラ　オクレテキテンヤ。　ホンデ　アイ
合わせ　していたら　1時間半以上も　遅れて来たんだ。　それで あい
ツ　キタトキ　ナンツッタト　オモウ。
つ　来た時　何て言ったと　思う。)
B：ナンテ　イッタン。
(何て　言ったの。)
A：オー　ワルイ　ワルイ。ワシ　ツルギ゜ヤシ　ジサ　アルンヤ。
(おお　悪い　悪い。　俺　鶴来だし　時差があるんだ。)
C：ワカマツセンパイラシーデスネ。
(若松先輩らしいですね。)
B：オレントキナンカナー　オー　ワルイ　ワルイ。　ジカンドーリニ　デテンケ
(俺の時など　おお　悪い　悪い。　時間どおりに　出たんだけれ
ド[5]　トチューデ　ウチュージンニ　ツレサラレテナ。
ど　途中で　宇宙人に　連れ去られてね。)
A：オマエ　ソレ　ウソヤロ。
(お前　それは嘘だろう。)
B：ウソヤ。
(嘘だ。)
C：ダッタラ　ナンデ　ウソ　ツクンデスカ。
(だったら　なぜ　嘘を　つくんですか。)
B：エッ。
(えっ。)
E〔男3〕：オー　ウーンナ　ヒサシブリヤナー。
(おお　みんな　ひさしぶりだなあ。)
A：オメ　オセーッテ　ミセ　ヨヤクシトルンヤゾー。

（お前　遅いって　　店を　予約しているんだぞ。）

E：アー　ワルイ　ワルイ。　ワシ　ツルキ゜ヤシ　ジサ　アルンヤ。

（ああ　悪い　　悪い。　　俺　　鶴来だし　　時差があるんだ。）

(1) 伝統的な金沢ことばではナニシトルカ゜となるところですが，末尾の連体格の助詞「の」にあたるカ゜がカ゜ンとなり，ナンシトルカ゜ンがさらにナンシトランと変化したものです。若い人の金沢ことばではナニシトルケ゜ン・ナンシトンケ゜ンとも言える部分ですが，それらの言い方に比べるとややぞんざいな印象を与えるようです。女性よりも男性によく聞かれる言い方です。

(2) 金沢ことばらしい～カ゜イヤが聞かれます。最近の若い人たちにはあまり使われなくなっています。

(3) 共通語であればチカ゜ウシナとなるところですが，ここにも伝統的な金沢ことばが受け継がれています。

(4) 上の(1)でふれた連体格の助詞「の」にあたるカ゜がカ゜ンとなったものです。

(5) 先にケ゜ンの成立との関連で説明したとおり，デタケ゜ンケドのデタケ゜ンがデテンと音変化したものです。

最後は地元の女性作家の作品「郭のおんな」の一節の朗読です。セリフには，今はもうあまり使われなくなった懐かしい金沢ことばも登場しています。

◆ミマッシマ[1]　**キョーノ　ムカイヤマノ　ヤサシケ゜ナー。オハナノ　セーヤロカ**

（ご覧なさい　　今日の　　向山（=卯辰山）の優しそうな。お花の　　せいだろうか

ヤマカ゜　シロー　ミエル。

山が　　白く　　見える。）

＜中　略＞

◆イツノマニヤラ　ヤマノ　フモトノ　ヌシン　ナッテシモテカラニ。　グルリジ

（いつの間にか　　山の　　麓の　　主に　　なってしまって。　　周り中の

ューノ　モンラ　ノーナッテシモテ　ホンマニ　ヒトリボッチニ　ノコサレテ

人たちは亡くなってしまって本当に　　一人ぼっちに　　残されてし

シモタ。　オトッツァンモ　オッカサンモ　オトートモ　イモートモ　オアネサ

まった。　お父さんも　　お母さんも　　弟も　　妹も　　お姉さん

ンモ　トモダチモ　ミーンナ　イッテシモタ。　ホンデ　サミシナッタサイナ

も　　友達も　　みんな　　逝ってしまった。それで　淋しくなった時は

カワベリノ　サンポニ　クルカ゜ヤ。　シバイコ゜ヤヤラ　エンブジョーヤラ　ナ

川縁の　　散歩に　　来るんだ。　芝居小屋や　　演舞場など　　懐

ツカシ　トコヤサケネー　ココナ。　ムカイヤマニ　サクラカ゜　サイタ　ムカ

かしい　所だからねえ　　ここは。　向山に　　桜が　　咲いた　向山

イヤマカ゜　モミジシタ　ウツクシーチューテ　ゾーロゾロト　オキャクサンニ

が　　紅葉した　　美しいと言って　　ぞろぞろと　　お客さんに
ツンダッテ　ヨー　キミシタ。
連れ立って　よく　来ました。)

(1) マは命令形に後接して命令の意味を強める終助詞です。北陸地方の方言で今も広く使用されるものです。

6．金沢ことばの現在と将来－まとめにかえて－

以上，第一部から第三部まで３巻のビデオに収録された金沢ことばを，文字化資料とともに見てきました。紙数の関係で，全ての会話の文字化資料を載せることはできませんでしたし，載せた部分についても注記は最小限にとどめざるをえませんでした。載せられなかった部分，また注記できなかった部分については，ご覧いただいた皆さん方で，文字化していただいたり，注記を追加していただくのがよいと思います。学校で教材として使っていただくこともできるでしょう。

ところで皆さんは金沢のことばについてどのように思っていらっしゃるでしょうか。筆者は数年前に金沢市内で，金沢生まれ金沢育ちの男性150人（60歳以上50人，25歳～40歳50人，高校生50人）と石川県外の出身で金沢に住んでいる25歳～40歳の男性50人に，金沢の方言や共通語についての意識調査を行なったことがあります。その結果，金沢生まれ金沢育ちの人たちはあまり自分たちの方言，つまり金沢のことばに好感をもっていないことがわかりました。その後，福井県や富山県で行われた同様の調査からも，北陸の人たちの自分たちの方言に対する好感度の低さ，意識の低さが浮き彫りになってきました。全国的に方言の良さが見直されつつある現在，残念ながら北陸地方ではまだまだその動きは鈍いようです。ことばは常に変化するものです。文字を持った共通語でさえそうですから，まして文字を持たない方言は変化しやすいものです。マスメディアの発達や社会の変化などにともなって全国各地で方言が大きく変容しつつあることもある意味では仕方のないことかもしれません。しかし，明治以降の標準語教育の中で方言はあまりにも無理な変化（共通語化）を強いられてきました。これからは，方言の自然な変化を認めつつ，地域社会の言語生活にとって必要な方言，魅力ある方言を共通語とともに使っていく，そうした方言と共通語の共生社会の実現が望まれます。

かつて，江戸時代の幕藩体制を背景に全国各地に成立した細かな方言の地域差は，今後少しずつ地域差の範囲を広げながらより大きな単位の地域差として収束して行くだろうと予想されています。その場合，金沢のことばは間違いなく石川県の地方共通語としての役割を担っていくことになるでしょう。今私たちが金沢ことばの現在と将来について考えてみることは，とりもなおさず石川県の方言の将来を考えることでもあるのです。

最後に，年輩の人の伝統的な金沢のことばと若い人の金沢ことばを比較して，金沢ことばがどのように変化しているかをあらためて見てみたいと思います。数年前に，有名なイソップ物語の話の一部を，金沢生まれ金沢育ちの大学生（当時19歳・女性）とその祖父

（当時71歳）に自分自身の方言に直してもらったものです。これらの比較によって私たちは，伝統的な金沢ことばの衰退と，将来石川県の地方共通語になっていくであろう新しい金沢ことばの一端を確認することができるでしょう。

原文（共通語）

①２匹の蛙の子が池のほとりで遊んでいました。
②そこへ牛が水を飲みにやってきて，間違って１匹の蛙の子を踏みつけて殺してしまいました。
③子蛙が１匹見当らないことに気がついたお母さん蛙は，兄さんはどこにいるのかと尋ねました。
④「お兄ちゃんは死んでしまったよお母さん。４本足のものすごく大きなやつがやって来て泥の中に踏みつぶされてしまったの。」
⑤「ものすごく大きなやつですって。このくらい大きかったかい。」と言うと，お母さん蛙は精一杯大きく見えるように，ぷうっと体をふくらませました。
⑥「うん！そう，もっと大きかった。」（以下省略）

〔71歳・男性〕

①ニヒキノ　ギャワズノコガ゛　イケノソバデ　アソンドッタガ゛ヤト。
②ホコエ　ウシガ゛　ミズオ　ノンニキテ　マチコ゛ーテ　イッピキノ　ギャワズノコオ　フンツケテ　コロイテモタ。
③チンケー　ギャワズガ゛　イッピキ　ミエンコトニ　キーツイタ　カーカギャワズワ　アンカ　ドコ　イッタガ゛ヤト　キータガ゛ヤト。
④「アンカ　ゴネテシモタガ゛ヤ　カーチャン。ヨンポンアシノ　ガンコニ　デカイヤツガ゛　キテー　ドロンナカニ　フミツブイテシモタ。」
⑤「ガンコニ　デカイヤツッテ　コンクライ　デカカッタンカ。」トユート　カーカギャワズワ　セーイッパイ　デカイガ゛ニ　ミエランニ　プーット　カラダ　フクラマイタ。
⑥「ウン。ホヤケド　マダマダ　デカカッタ。」

〔19歳・女性〕

①ニヒキノ　カエルノコガ゛　イケノソバデ　アソンドッテンテ。
②ソコニ　ウアシガ゛　ミズ　ノミニキテー　マチガ゛エテ　イッピキノ　カエルノコオ　フンズケテ　コロシテシマッテン。
③コガ゛エルガ゛　イッピキ　ミアタランコトニ　キーツイタ　オカーサンガ゛エルワ　ニーチャンワ　ドコニ　オルンカ　キーテン。
④「ニーチャン　シンデシモータワ　カーチャン。ヨンホンアシノ　モノスケ゛ー　デッケーヤツガ゛　キテ　ドロンナカニ　フンズケラレテシマッタワ。」
⑤「モノスケ゛ー　デッケーヤツヤッテー。コンクライ　デカカッタンカ。」トイッテ　オカーサンガ゛エルワ　セーイッパイ　デカク　ミエルガ゛ニ　プーット　カラダオ　フ

クラマシテン。
⑥「ウン。ソーヤケド　モット　デカカッタワ。」

【主要参考文献】

岩井隆盛（1959）「石川県金沢市彦三一番丁」,『日本方言の記述的研究』, 明治書院
川本栄一郎（1983）「石川県の方言」,『講座方言学6　中部地方の方言』, 国書刊行会
志受俊孝（1983）『金沢の方言ー金沢弁のいろいろー』, 北国出版社
島田昌彦監修（1987）『「おいであそばせ／おいだすばせ』（美しい金沢言葉普及事業「接客ことば」改訂版）, 金沢市商工観光課
島田昌彦（1989）「金沢のことば」,『金沢市史（現代編）続編』, 金沢市
川本栄一郎（1992）「石川県方言」,『現代日本語方言大辞典　第1巻』, 明治書院
加藤和夫（1992）「福井県方言」,『現代日本語方言大辞典　第1巻』, 明治書院
北國新聞社編集局編〈加藤和夫編集協力〉（1995）『頑張りまっし金沢ことば』, 北國新聞社
加藤和夫（1995）「隠れた方言コンプレックス」,『変容する日本の方言』, 大修館書店
島田昌彦（1998）『加賀城下町の言葉』, 能登印刷出版部
加藤和夫（1998）「方言と共通語の共生をめざして」,「北国新聞」1998年4月5日付・北國文化欄

ビデオ「金沢ことば」の解説

解説書中に以下の下線のずれ，誤植等がございました。ご訂正下さい。（加藤和夫）

正　誤　表

ﾍﾟｰｼﾞ・行	誤	正
1ﾍﾟｰｼﾞ・29行	ここではまず，北陸地方の…	（段落初め冒頭1字下げる）
8ﾍﾟｰｼﾞ・34行	傷桃を	木津桃
8ﾍﾟｰｼﾞ・36行	傷の　兄さん	木津の　姉さん
9ﾍﾟｰｼﾞ・ 5行	傷ものも	木津桃
10ﾍﾟｰｼﾞ・25行	北陸では金沢だけに	石川県内では金沢だけに
17ﾍﾟｰｼﾞ・26行	～メーニ<u>チヤ</u>ッタンヤ。	～メーニチヤッタンヤ。
17ﾍﾟｰｼﾞ・28行	コンナヨナ　モンジャ(1)。	コンナヨナ　モン<u>ジャ</u>(1)。
19ﾍﾟｰｼﾞ・20行	ズ<u>ーット</u>　アー　アレ	ズーット　アー　アレ
19ﾍﾟｰｼﾞ・22行	ノコッテシモーワケヤネ(3)。	ノコッテ<u>シモー</u>ワケヤネ(3)。
30ﾍﾟｰｼﾞ・21行	マー　コレン<u>チュテ</u>	マー　コレンチュテ
30ﾍﾟｰｼﾞ・25行	ターボーノ(2)　ジブンニ	<u>ターボ</u>ーノ(2)　ジブンニ
30ﾍﾟｰｼﾞ・25行	アノ　<u>ジブン</u>　サイｶﾞワ	アノ　ジブン　サイｶﾞワ
30ﾍﾟｰｼﾞ・29行	アビニイッタゾイノ(3)	アビニイッタ<u>ゾイノ</u>(3)
36ﾍﾟｰｼﾞ・27行	②ソコニ　ウアシｶﾞ	②ソコニ　ウシｶﾞ